

特別史跡

# 一乘谷朝倉氏遺跡

1999



福井県立一乘谷朝倉氏遺跡資料館



第104次発掘調査区遠景（南東から）



漆器手箱・漆器小椀



特別史跡

# 一乘谷朝倉氏遺跡

1999

福井県立一乘谷朝倉氏遺跡資料館

# 序 文

本年は、昨年度に引き続き城戸ノ内町字齊藤地係の武家屋敷を発掘調査し、南北道路に面した武家屋敷跡を3区画検出しました。特に月見櫓の下の武家屋敷は一乗谷古絵図に記された斎藤兵部大輔跡と考えられていましたが、建物跡から甲冑の大袖や草摺、あるいは兜鍪が出土したり、唐物荘厳とされる中国製陶磁器の優品が出土しており、この推測を裏付ける大変貴重な成果を得ることができました。

環境整備は平成7・8年に発掘した東新町地係の御所・安養寺跡の整備を実施しました。この地区には初代城主孝景が建立したと伝える安養寺跡や15代将軍足利義昭が一時期滞在した御所跡があり、上城戸周辺の整備には重要な場所でもあります。この整備により、史跡の入口でもある上城戸周辺がより一層充実したものになると思います。

また、朝倉館前の園路にかかる排水溝の暗渠に橋をかけて、排水しやすいように整備しました。

企画展示では、昨年終了した西山光照寺跡の石仏覆屋と遺構の復元整備にちなみ、「一乗谷の宗教と信仰」と題して企画展を実施しました。これは一乗谷の寺院や神社の調査成果をはじめて展示に取り上げたものであり、朝倉氏の宗教政策の一端を明らかにする試みともなりました。

最後に、事業の遂行にあたりご指導・ご鞭撻をいただきました文化庁をはじめ関係各機関、各位の皆様と、あたたかいご協力をいただきました地元の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館  
館長 青木 豊 昭



## 例 言

1. 本書は、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が平成11年度に実施した、国庫補助事業による発掘調査および環境整備事業の概要報告書である。
2. 本年度は、発掘調査・整備事業「中期10ヵ年計画」の2年度目にあたる。本書には第104次調査の成果および御所・安養寺跡の遺構復元整備工事の概要等を収録した。
3. 調査区のグリッド設定については、昨年度の第102次調査に併せた軸方位によって設定した。空中写真測量に関しては、座標系第VI系を使用した。
4. 本書の作成にあたっては、館長の指導の下、資料館員の検討・討議を経て、南洋一郎が編集を担当した。又、執筆については文末にその文責名を記した。

## 目 次

巻首図版

序文

例言

目次

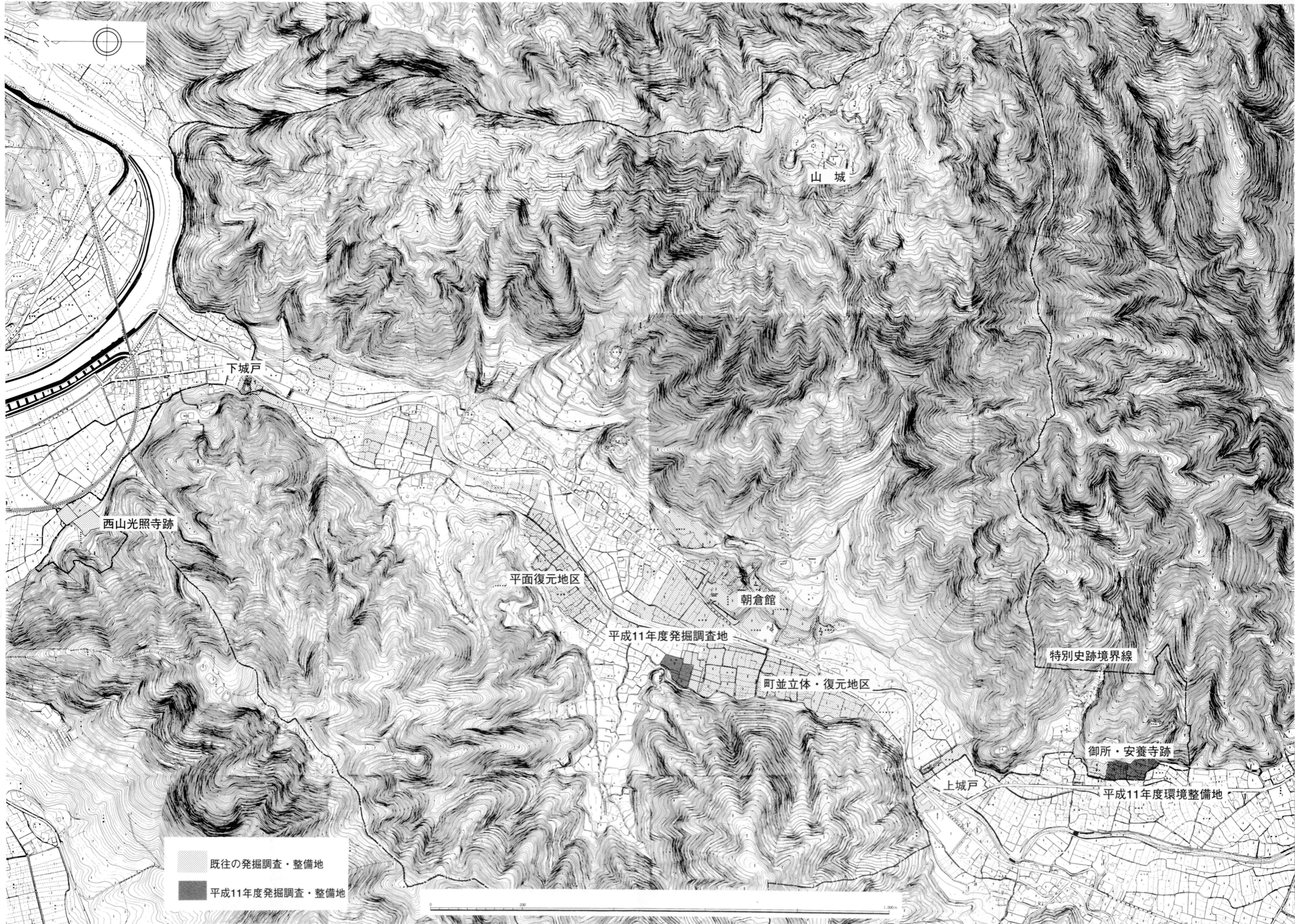
1. 平成11年度の事業概要	3
2. 第104次調査・遺構	6
3. 第104次調査・遺物	15
4. その他の調査	26
現状変更許可申請による宅地造成に伴う事前調査（第105次）	
整備に伴う瓜割清水の事前調査（第106次）	
5. 環境整備	27
御所・安養寺跡遺構復元整備工事	
朝倉館前園路橋設置工事	

第1表 平成11年度事業概要一覧

第2表 第104次調査出土遺物一覧

図版 第104次調査・遺構	PL. 1 ~ 4
同 調査・遺物	PL. 5 ~ 10
環境整備	PL. 11 ~ 13 (上)
その他の調査・遺構	PL. 13 (上) ~ 14





第1図 平成11年度発掘調査・環境整備位置図



# 1. 平成11年度の事業概要

本年度の朝倉氏遺跡における発掘調査は、第2次中期10ヵ年計画の2年度目に入り、昨年実施した字斎藤地係の武家屋敷の調査に隣接する北半部分の調査を実施した。その結果、町並立体復元地区の南北道路に続く幹線道路を検出し、この道路を挟んで、東西に土塁を有する武家屋敷が3区画分確認された。

また、城戸ノ内町字瓜割流においては、第106次調査として、瓜割清水に隣接する区画120㎡を発掘した。その結果、礎石建物を含む遺構が検出され、何らかの屋敷区画が接して遺存していることが確認された。

朝倉館前の一乗谷川河川改修工事に伴う現状変更対応の事前調査として、護岸工事で積み直しを行なう範囲について事前調査を実施して来たが、本年度は、字米津において試掘を実施した。面積は100㎡であった。発掘の結果、当該期に関する遺構は検出されず、後世の河川の氾濫等によって失われたものと判断された。

同じく現状変更対応の事前調査として、城戸ノ内町9-18（字瓜割流）所在の奥田道雄氏宅の新築工事に伴う調査を実施した。発掘の結果、礎石建物、通路、石積施設、甕埋設遺構、便所遺構等々の遺構が検出された。

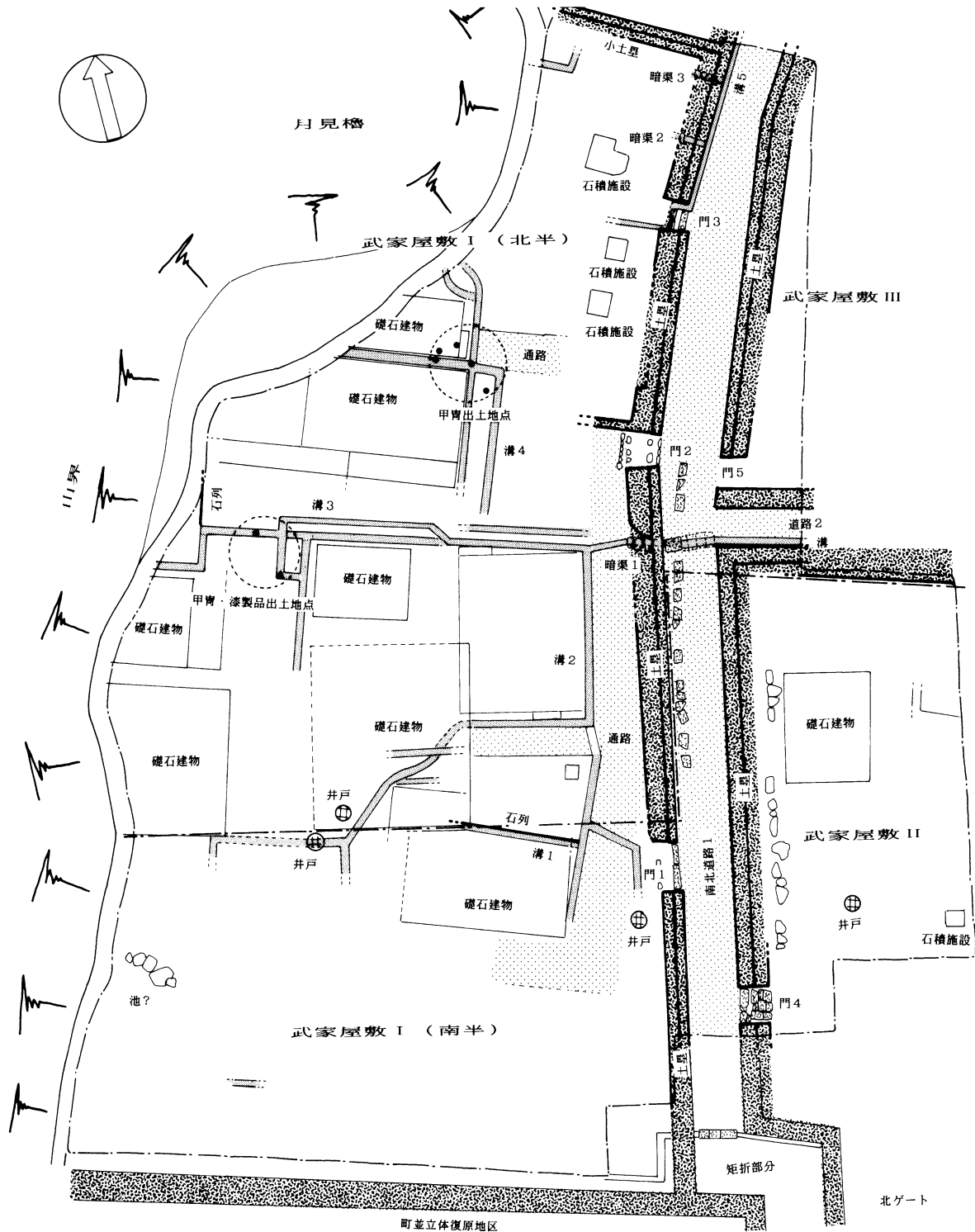
環境整備事業としては、平成7・8年度に発掘調査を実施している、御所・安養寺跡について遺構復元整備工事を実施した。この整備により、上城戸南方に展開する朝倉氏遺跡の主要遺跡のひとつである御所・安養寺跡について見学が可能となった。

保存処理については、本年度より、従来のPEG樹脂含浸による方法では処理の困難な漆器について、専門的に処理可能な機関に外注し、委託事業として保存処理を実施することとした。第1次5ヵ年による実施計画をたて、特に保存処理が急がれる朝倉館出土の漆器製品について保存処理を行なった。以下事業一覧表参照。

調査回数	調査箇所	調査期間	面積	調査理由
103次	城戸ノ内町字米津	4月1日～7日	100㎡	河川改修に伴う事前調査
104次	城戸ノ内町字斎藤	4月8日～12月24日	2,000㎡	計画調査
105次	城戸ノ内町9-18	8月23日～9月2日	120㎡	宅地造成に伴う事前調査
106次	城戸ノ内町字瓜割流	11月2日～12月1日	225㎡	計画調査
環境整備箇所		期間	整備事業内容	
東新町字御所・安養寺		平成11年4月～平成12年3月31日	御所・安養寺跡の遺構復元整備工事	
保存処理		期間	事業内容	
一乗谷朝倉氏遺跡出土の漆器製品		平成11年4月1日～平成12年3月31日	朝倉館（第9次調査）出土の漆椀・皿他20点	

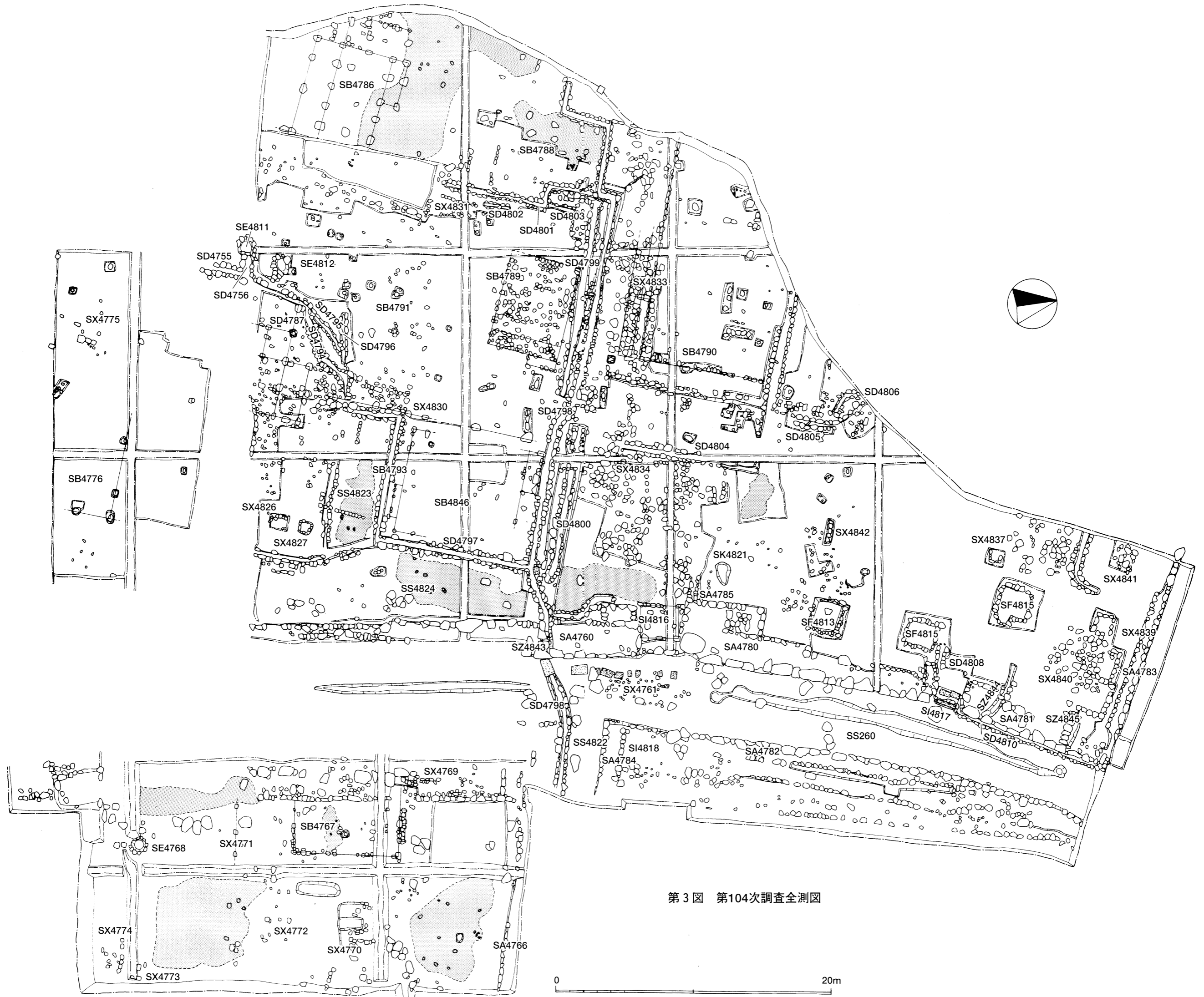
## 2. 第104次調査・遺構（第2～10図、PL.1～4）

本年度は第102次調査に引き続き、その北隣城戸ノ内町字斉藤地係約2,000㎡について発掘を実施した（第2・3図参照）。本調査地は朝倉館の西方、月見櫓跡の真下にあり、八地谷の



第2図 第104次発掘調査遺構模式図 (S=1/185)





第3図 第104次調査全測図

0 20m

谷頭南付け根部分に位置する。一乗谷古絵図には「斎藤兵部大輔跡」と記される場所にあたり、一乗谷朝倉氏五代城主義景の側室の父にあたる斎藤兵部少輔の屋敷跡であろうとの推測のもとに発掘を進めた。調査に要した期間は4月1日～12月20日までの8カ月であった。

斎藤兵部少  
輔

調査の結果、町割の基本となる遺構として昨年度発掘した南北方向の幹線道路の続きを検出し、その東側に東西道路を新たに検出した。この2本の道路により調査区は3つの区画に分けられ、以下南北幹線道路の西側を武家屋敷Ⅰ、東側を同Ⅱ・Ⅲと呼ぶ。武家屋敷の内部は、上層遺構の残りはよくなかったものの溝や井戸、石積施設など多数の下層遺構が検出された。

#### <町割に関する遺構>

**SA4760・4780・4781** 南北幹線道路SS260とその西側にある武家屋敷Ⅰを区画する土塁である。SA4760は昨年度検出した分に引き続き約8m検出した。全長約30mとなる。幅は約2.4m。SA4780はその北にあり、全長約18mで幅は2.0～2.5m。SA4781は更に北に続き、約12m検出したが、北端部は調査区外のため未詳、幅約2.5mである（第3図）。

**SI4816・4817** いずれも武家屋敷Ⅰの北にあり南北幹線道路SS260に開く門である。今回の調査で特に注意される重要な遺構で、門に接する部分の土塁の下部構造が検出された。SI4816は幅2.7mで北側には1.8×1.4mの巨大な袖石が仰向けに倒れていた。蹴上石の内側約1mのところには2個の門礎石を検出した。その心々間の距離は2.3mである。北側の礎石には框の木組の痕跡が残っている。門の両側は土塁幅が4.5mと3.5mに広がり、袖塀が設けられていたものとみられ、その北側には幅0.7mの小土塁SA4785が取り付けられている。SI4817は幅1.8mと小型だが、やはり両側の土塁の幅が広がっており、袖塀が設けられていたものとみられる。シャクダニ石踏み石3個が2段に残っており、またその間を排水溝が流れる構造となっている（第4、7図）。

袖塀

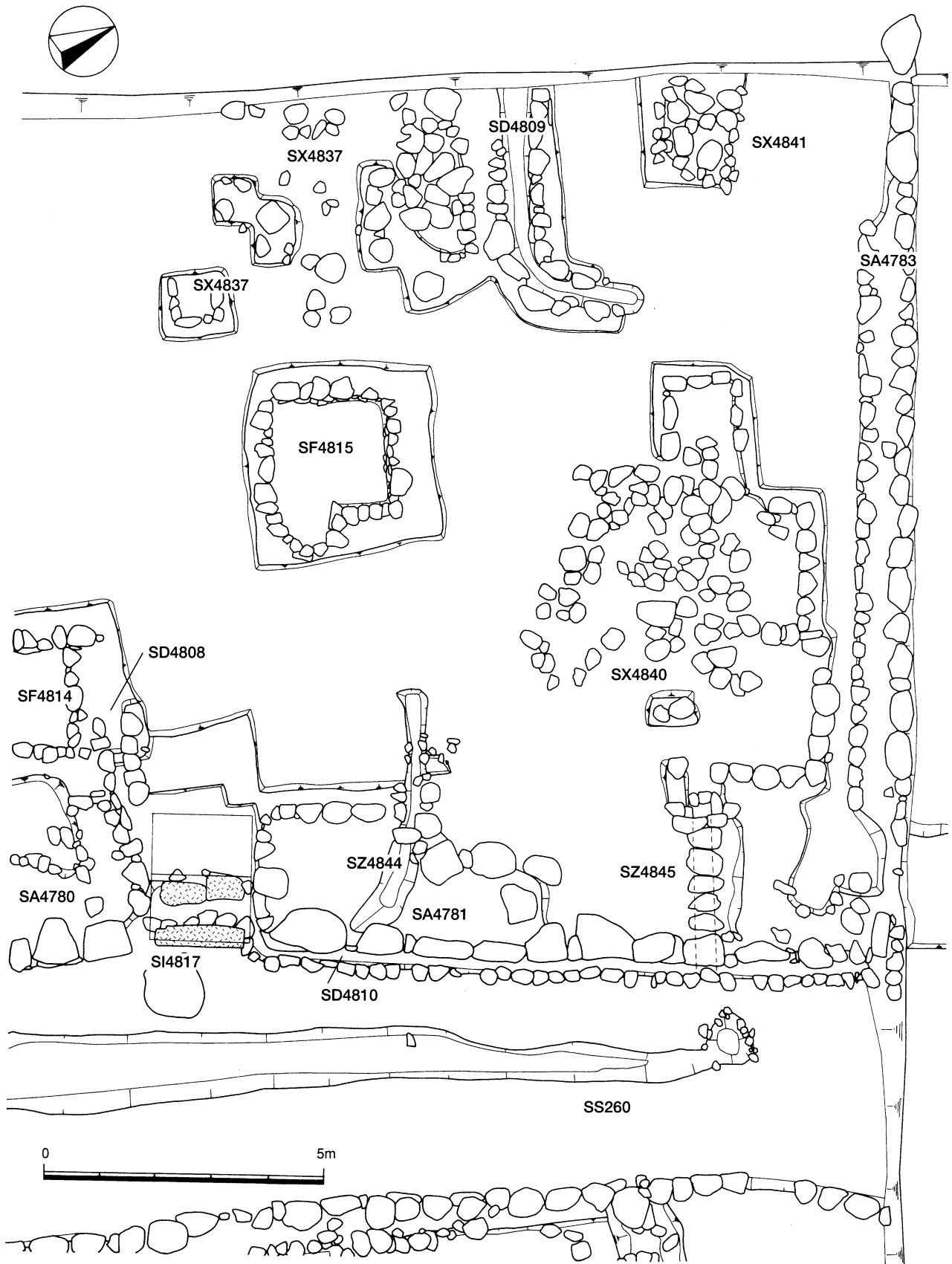
**SA4782** 南北幹線道路SS260の東側北部にある武家屋敷Ⅲの西端を区画する土塁である。長さ約31m検出した。北端は調査区外に続き未詳。南端はこの屋敷の門SI4818に至る。この土塁は西側武家屋敷土塁SA4780、4781の屈曲に対応して、3カ所でそれぞれ5°、5°、15° 東に折れて向きを変えている。幅約3mでその中間部に一部並行する石垣がある（第3図）。

**SA4783** 調査区の北端にある武家屋敷Ⅰの北を限る幅約1mの小土塁である。長さ約17mほど検出したが、西端は月見槽下に取り付くようである。この土塁は北面と南面で石垣の積み方が異なり、北面は大きな割石を使用しているのに対して、南面は小振りな河原石を積んでいる（第4図）。

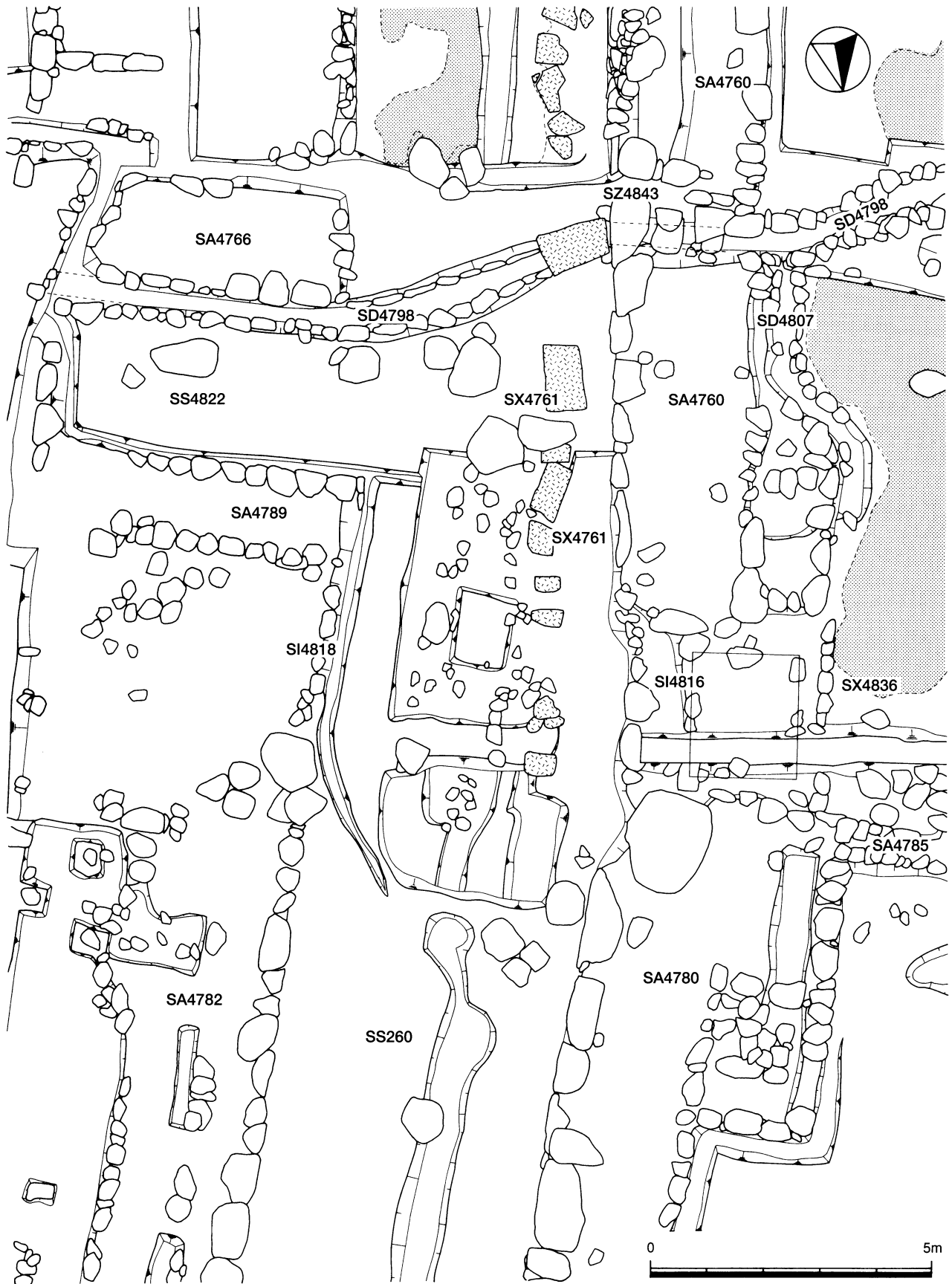
**SA4784** 武家屋敷Ⅲの南辺、東西方向の道路SS4822に沿って走る土塁で幅1.6mである。長さ4mほど検出したが、東端は調査区外のため未詳。削平が激しく基底石一段分が遺存するのみであった。この土塁は武家屋敷Ⅱの北辺土塁SA4766と並行しており、また幅もほぼ同規模である（第3図）。

**SS260** この調査区の中央を南北に走る道路で今年度は昨年度の続き42mほどを検出した。幅は両側の土塁によって規制されているので不定で3.7～5mである。門SI4816の前面で昨年度検出したものと同様にシャクダニ石の板石を一定間隔で敷き並べたものが出土している。

**SS4822** 調査区の中央部でSS260にT字状に直交して東へ向かう道路。幅2.5mで5mほど検



第 4 図 第104次調査遺構図 (1)



第7図 第104次調査遺構図(3)

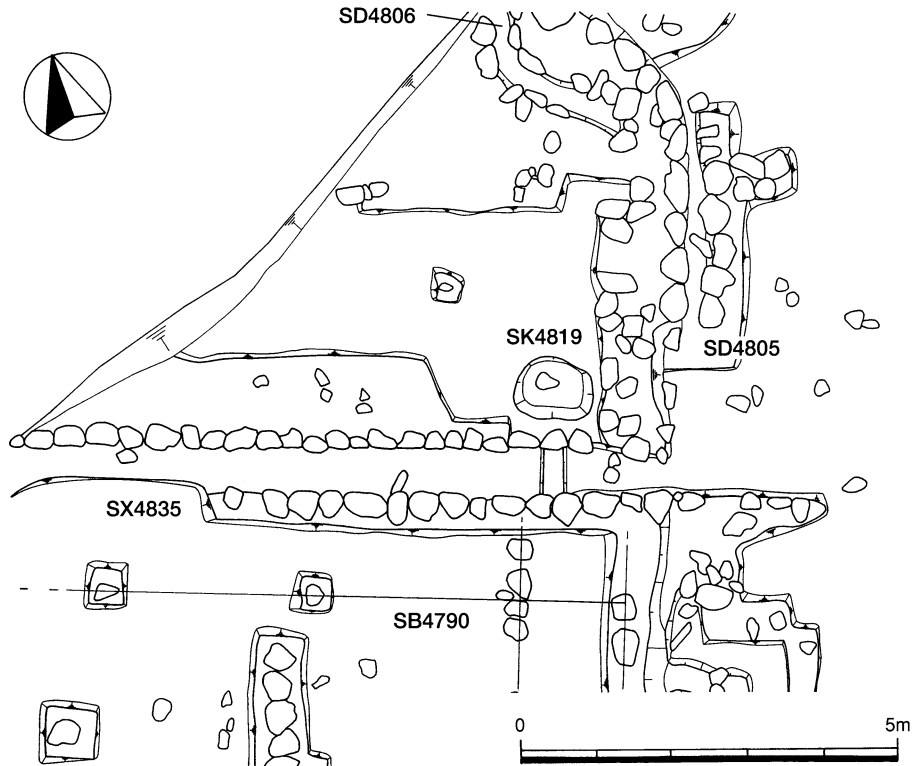
出した（第7図）。

<武家屋敷 I>

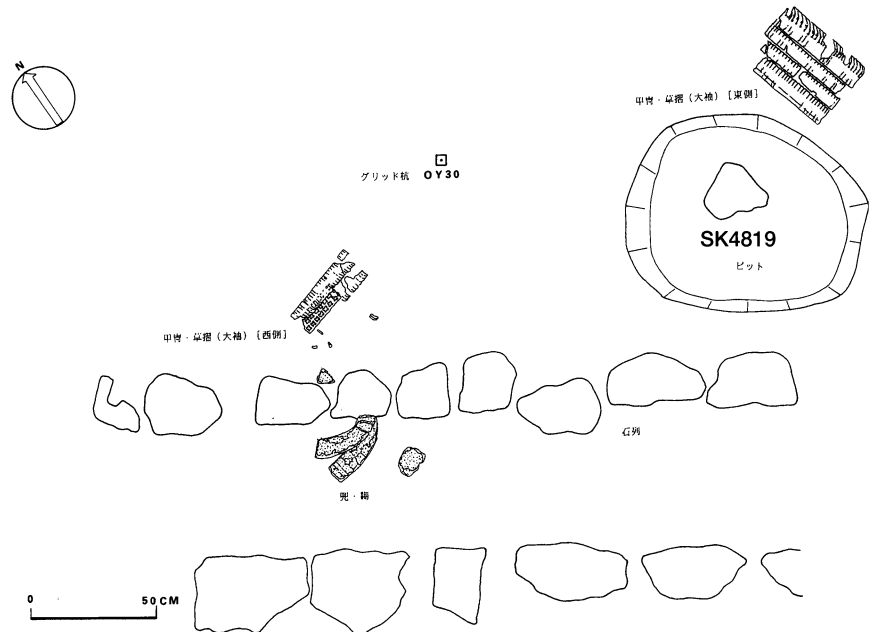
南北幹線道路SS260より西側の山際に至る大きな区画で、南隣の第102次調査区から続く。SS260に対して合計3つの門が開くにもかかわらず、内部に土塁・柵列などの明確な区画遺構を見出さなかった。この武家屋敷 I を南北に二分する遺構として東西方向の溝SD4798・4799・4800があり、これを境とすれば北半分と南半分に分けることができる。上層遺構は山際の建物SB4786やSX4842、SD4808などわずかで、その他は下層遺構である。

建物は南半分に5棟、北半分に1棟検出された。溝は良好に残っており、最終時期には中央の東西方向溝SD4798と、北半分の屋敷の門SI4817を通る溝SD4808に排水が集中するものと考えられる。北半土塁SA4781には2カ所で暗渠が検出されたが、最終時期にはいずれも閉じられていた（第3、4図）。以下主要な遺構について叙述する。

**SB4786** この屋敷の南半分の西端部に位置する礎石建物で比較的大振りの礎石が残っている。西側は山際の調査区外に続き未詳だが、東西9.5m、南北6.8mの規模をもつ（第10図）。

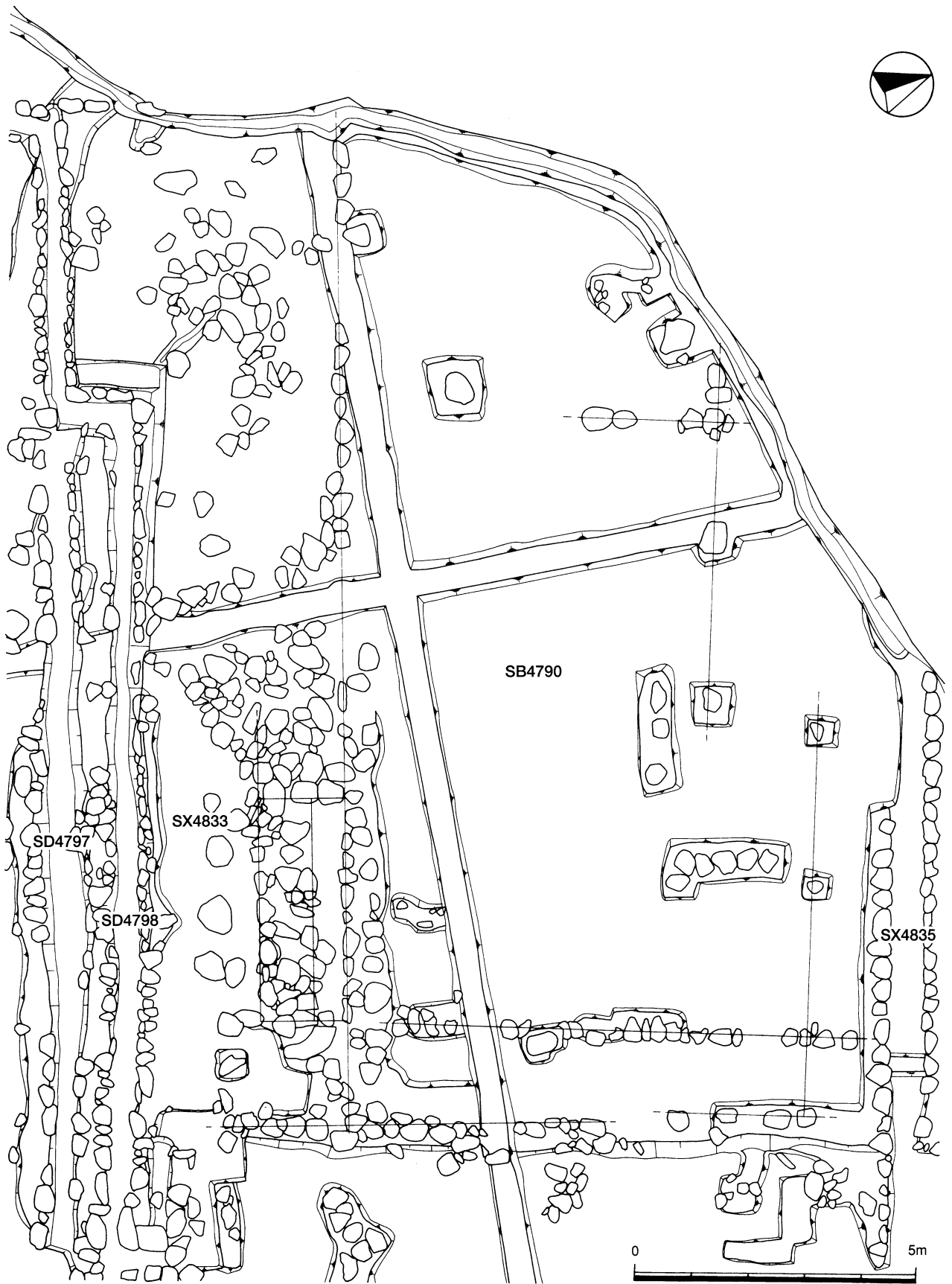


第5図 第104次調査遺構図(2)



第6図 甲冑・兜出土状況(2)





第 8 図 第104次調査遺構図 (4)

SB4789 この屋敷のほぼ中央部にあり、東西溝SD4799に接する礎石建物で、石敷がよく残っている。これまでの類例から蔵と推定される。東西7.5m、南北5mの規模。上層面が削平を受けているらしく、石敷きは2面見られるが、上層面の規模は不明。

SB4846 SD4798、SD4793・4797によって区画される敷地一杯に建てられている礎石建物で、北と南に庇状の張出をもつ（第9図）。

SS4823・4824 土塁内側にある砂利敷きの通路である。SS4824は溝SD4798を越えて北半分にはまでつながっており、門SI4816から内部の建物に通じる通路とみられる（第9図）。

SD4794～4796 この屋敷の南端中央部にある石組の溝で、SD4794が最終時期の遺構で側石は2石分のこり、幅0.4mである。SD4795とSD4796は1石分のみ残り、幅はそれぞれ0.3mと0.2mで、SD4794により改修されている。これらの溝はもとSD4755→4794→4793→4797の順に流れる、連続した溝と推定され屋敷南半の主要な排水溝とみられる。SD4793には炭化した板きれや茅束が充満していた（第9図）。

SD4798～4800 調査区の中央を東西に流れる溝で武家屋敷Ⅰの排水の大部分を占める。SD4798は山際から直角に4回折れ、14mほど東へ流れて一旦SD4799と交差し、14mほど流れて再びSD4800と交差して暗渠SZ4843につながる。暗渠SZ4843より土塁SA4760をくぐり、道路SS260を横断して道路SS4822の南側側溝となる。東端部は調査区外のため未詳であるが、全長約57m分を検出した。幅0.4m～0.5mで1、2石残存している。溝側石の積み方の観察や溝底の高低差を勘案して推測すれば、SD4799→SD4798・SD4800→SD4798の順に推移したのではないかと考えられる（第3、8図）。

SD4801～4803 武家屋敷Ⅰ南半部の西側を南北に流れ、SD4798に注ぐ溝である。SD4801は最終段階にはSD4803とつながっていたものと考えられる。この溝より、口絵（下段）に示した化粧箱かと考えられる「沈金果実文手箱」の蓋及び黒漆塗り小椀が入れ子で2個出土した。SD4892はSD4801と並行する溝で1.8m検出したが、攪乱が激しく、詳細は不明である。

沈金果実文  
手箱・黒漆  
小椀出土

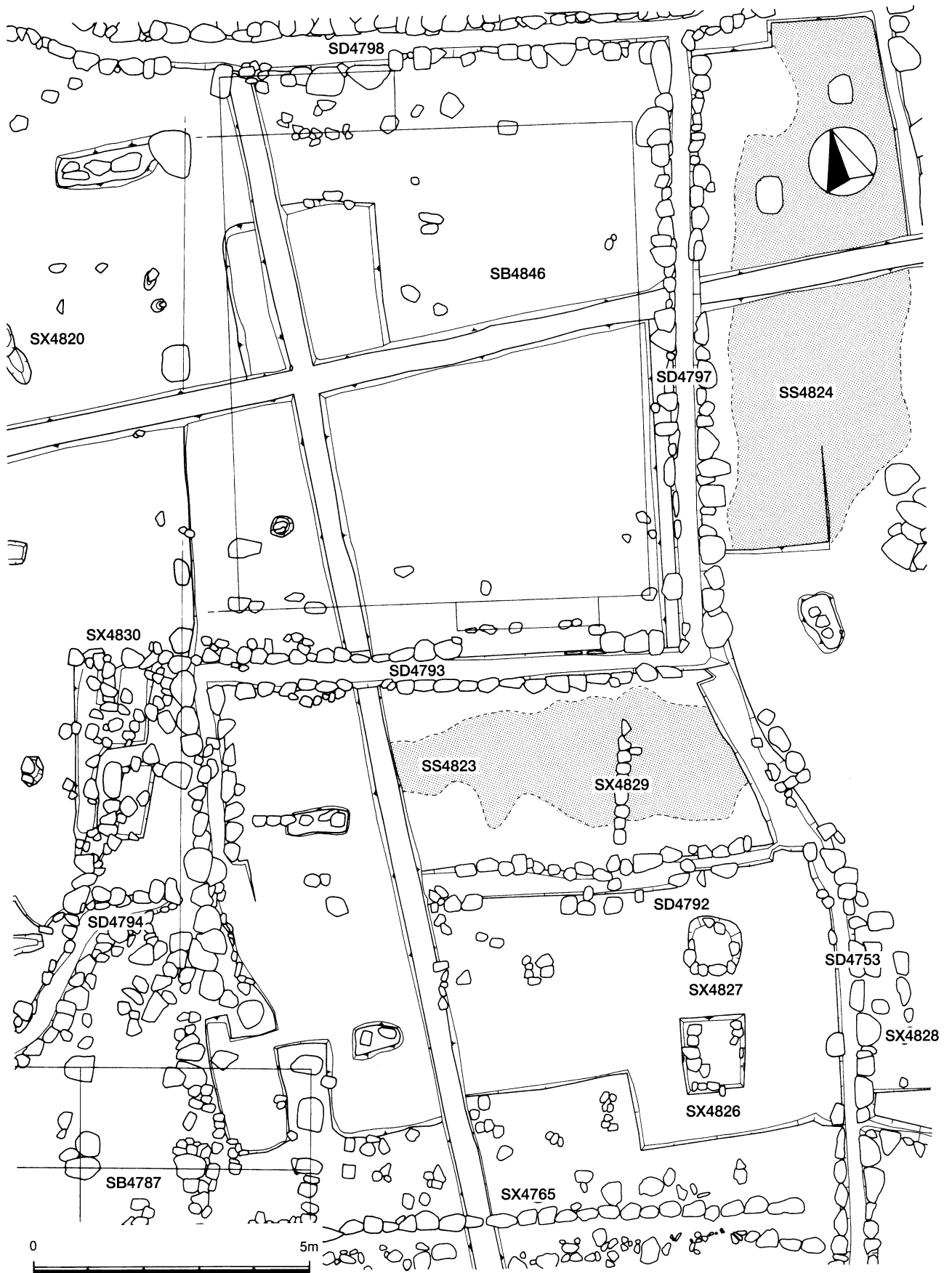
SD4804 武家屋敷Ⅰ北半の中央を南北に流れる石組溝で、上層遺構である。幅0.2mで11.5mほど検出した。北端で西に折れ曲がっている痕跡が確認される。南端部は東西溝SD4798と連絡するものと考えられるが、攪乱により側石が残存せず未詳である。またこの溝に伴うものとして、SX4847の砂利敷がある。恐らく通路が並行していたものと考えられるが、これも遺存状況が悪く不明である。

SB4790 武家屋敷北半部の礎石建物で、東西溝SD4798の北に位置する。間口9.5m、奥行き18mの敷地に建てられていたものと見られるが、攪乱のため規模を確認できない。礎石列を数個分検出した。この建物の北側に幅0.7mの溝状の石列が走り、山際に接して別の建物があったと考えられる。この建物より甲冑大袖、草摺、兜鍬が出土した（第5、6図）。

甲冑大袖草  
摺・兜鍬出  
土

SD4805・4806・4809 武家屋敷Ⅰの北半分で山際から続く溝である。いずれも数m検出ただけであり、屋敷内部では削平されている。SD4809は大振りの石で2石積む。他は1石のみ残る。

SD4808・4810 北側の門SI4817から屋敷の外部に排水する石組の溝である。SD4808は幅0.2mでわずかに1.5m分残存する。SD4810はそれにつながると推定され、門SI4817の踏み石の下を



第 9 図 第104次調査遺構図 (5)

通りSA4781の際を道路側溝となって北へ流れる（第4図）。

SE4811 この井戸は溝SD4756を切って掘り込まれている。内径で1.8mを測る。

SE4812 井戸SE4811の北に1.5m離れて検出された。天端石が残っており、最終段階で開いていた井戸であろうと考えられる。後世の攪乱によりシャクダニ石やガラ石が充満していた。内径で約1.7mを測る。

石積施設が  
集中

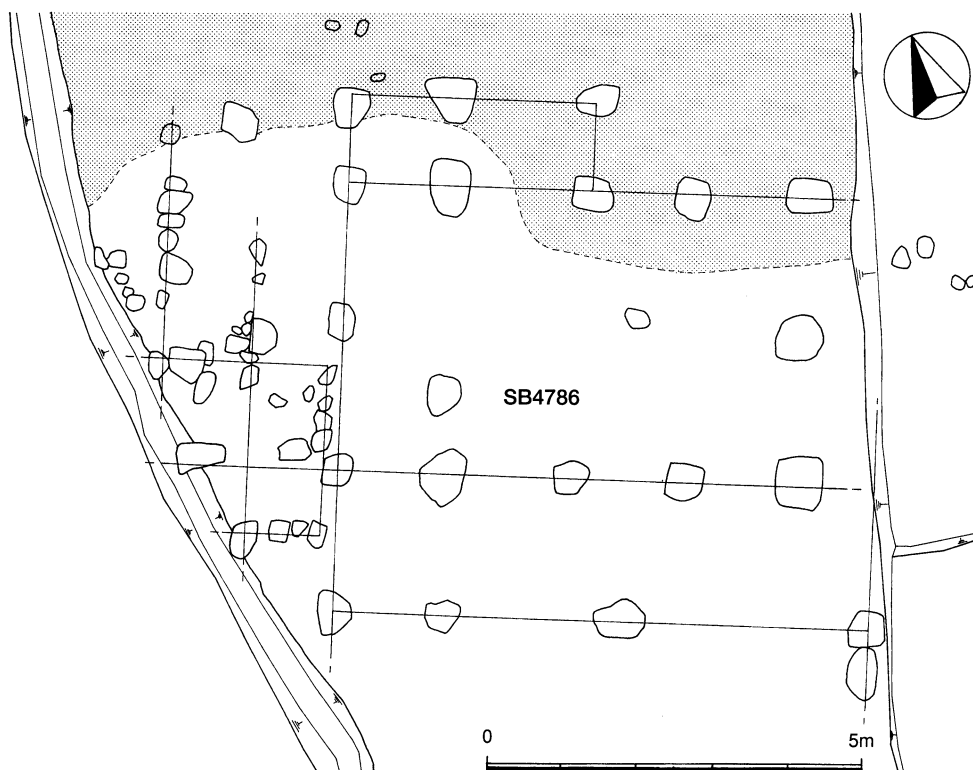
SF4813・4814・4815 今年度の調査では石積施設の検出例が比較的少なく、武家屋敷Ⅰの北半部に一辺2m前後の大型の石積施設3カ所が集中的に検出された。このうち最も北にあるSF4815は一部に半円形の張り出しを持つ特異な形をしている（第4図）。

#### <武家屋敷Ⅱ>

南北幹線道路SS260の東側、東西道路SS4822の南側の区画である。昨年度の調査と重複するが、良好な下層遺構を検出し、東西4.5m南北7.6mの礎石建物SB4767や井戸SE4768などを検出した。特にSB4767は西半部分がSA4763の下位に延びていることが確認された。

#### <武家屋敷Ⅲ>

同じく南北幹線道路SS260の東側で、東西道路SS4822の北側の区画である。土塁SA4782・4784がL字状に巡り、南端で門SI4818が開く。調査区はこの区画の西端の幅4～6mの範囲にすぎないが、土塁SA4782に2列の石列を検出した。屋敷側の部分はおそらく武者走りのような段になっていたものと推定される。なお調査区東端の石列は後世の水田耕作に関わるものである。（佐藤 圭）



第10図 第104次調査遺構図（6）

## 2. 第104次調査・遺物（第11～15図、PL.5～10）

本調査で出土した遺物は、総点数16,871点に上る（第2表参照）。内訳は越前焼4,493点（26.63%）、瓦質・土師質土器8,896点（52.72%）、瀬戸・美濃製品340点（2.0%）、中国製陶磁器1,932点（11.45%）、朝鮮製陶磁器105点（0.62%）、金属製品110点（0.65%）、石製品581点（3.44%）、木製品191点（1.13%）等である。越前焼、土師質土器等の合計比は遺物全体の7割を超え、従前の傾向にはほぼ対応した割合となっている。出土遺構は、後世の削平や攪乱でも比較的遺物が拡散しにくいとみられる溝や井戸、石積施設等に集中する傾向があり、山際での削平が比較的少ない場所でも遺物が多く出土した。

特筆すべき遺物には、前項でも触れたように、月見櫓下の建物の一角からまとまって出土した甲冑・兜がある。これまでも武器・武具類としては甲冑小札の断片や胴丸胸板、兜前 甲冑・兜

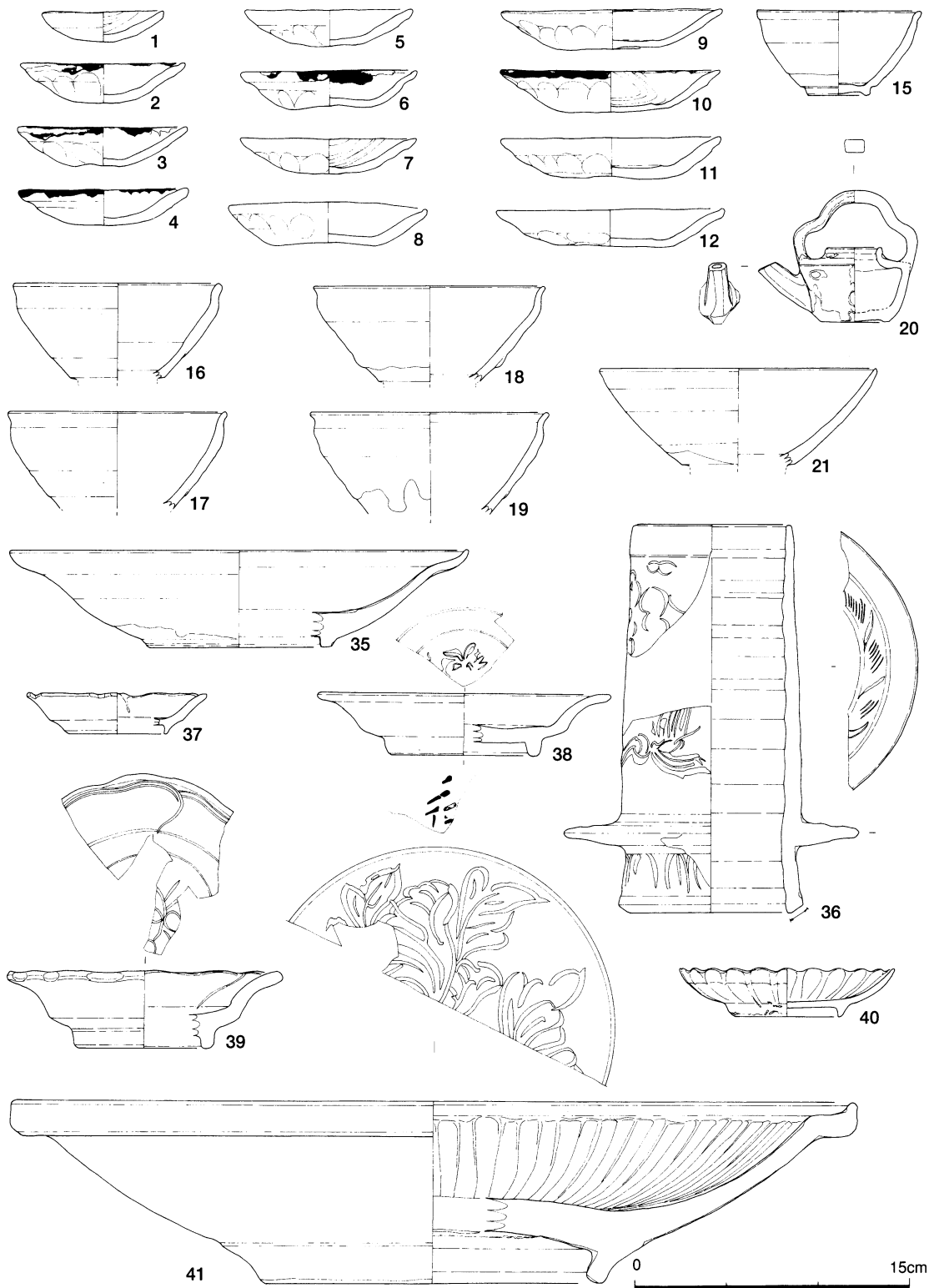
器種	点数	%	
越前焼	甕	2,905	
	壺	826	
	鉢	205	
	播鉢	522	
	その他	35	
計	4,493	26.63	
土師質	皿	8,823	
	土釜	11	
	陶錘	24	
	その他	8	
計	8,866	52.55	
製鉄	碗	160	
	皿	10	
	壺	62	
	茶入れ	10	
	その他	12	
計	254	1.50	
陶釉	碗	20	
	皿	26	
	鉢	34	
	香炉	4	
	その他	2	
計	86	0.50	
瓦質	火鉢	6	
	香炉	11	
	風炉	2	
	その他	11	
計	30	0.17	
器	国産陶器・その他	11	
	近世・その他	147	
	計	158	0.93
小計	13,887	82.31	

器種	点数	%		
中国製陶磁器	碗	116		
	皿	254		
	鉢	7		
	盤	105		
	壺	36		
	角杯	7		
	香炉	19		
	花托	25		
	花瓶	2		
	その他	7		
	計	578	3.42	
	白磁	碗	12	
		皿	636	
坏		66		
壺		7		
梅瓶の蓋		5		
その他	1			
計	727	4.30		
染付器	碗	139		
	皿	260		
	坏	25		
	壺	24		
	双耳瓶	15		
	その他	4		
計	467	2.76		
中国壺・その他	160	0.94		
朝鮮・その他	105	0.62		
小計	2,037	12.07		
金属	銅銭	34	7	
	釘	50		
	小柄	2		
	提子	3		
	鍔	3		
	鎧・兜	6		
	金覆輪	1		
	その他	11		
	計	110	0.65	
	石製品	バンドコ	229	
板石		30		
茶臼		11		
硯		25		
炉壇		23		
盤		19		
砥石		10		
火鉢		70		
碁石		54		
その他		110		
計	581	3.44		
小計	691	4.09		

器種	点数	%	
木製品	漆製品	13	1
	板材	18	
	炭化材	66	
	鎧・兜	20	
	その他	74	
計	191	1.13	
その他	種子	22	
	壁土	26	
	東南アジア仏像	1	
	その他	16	
計	65	0.38	
小計	256	1.51	
合計	16,871	100.0	

表2 第104次調査出土遺物一覧





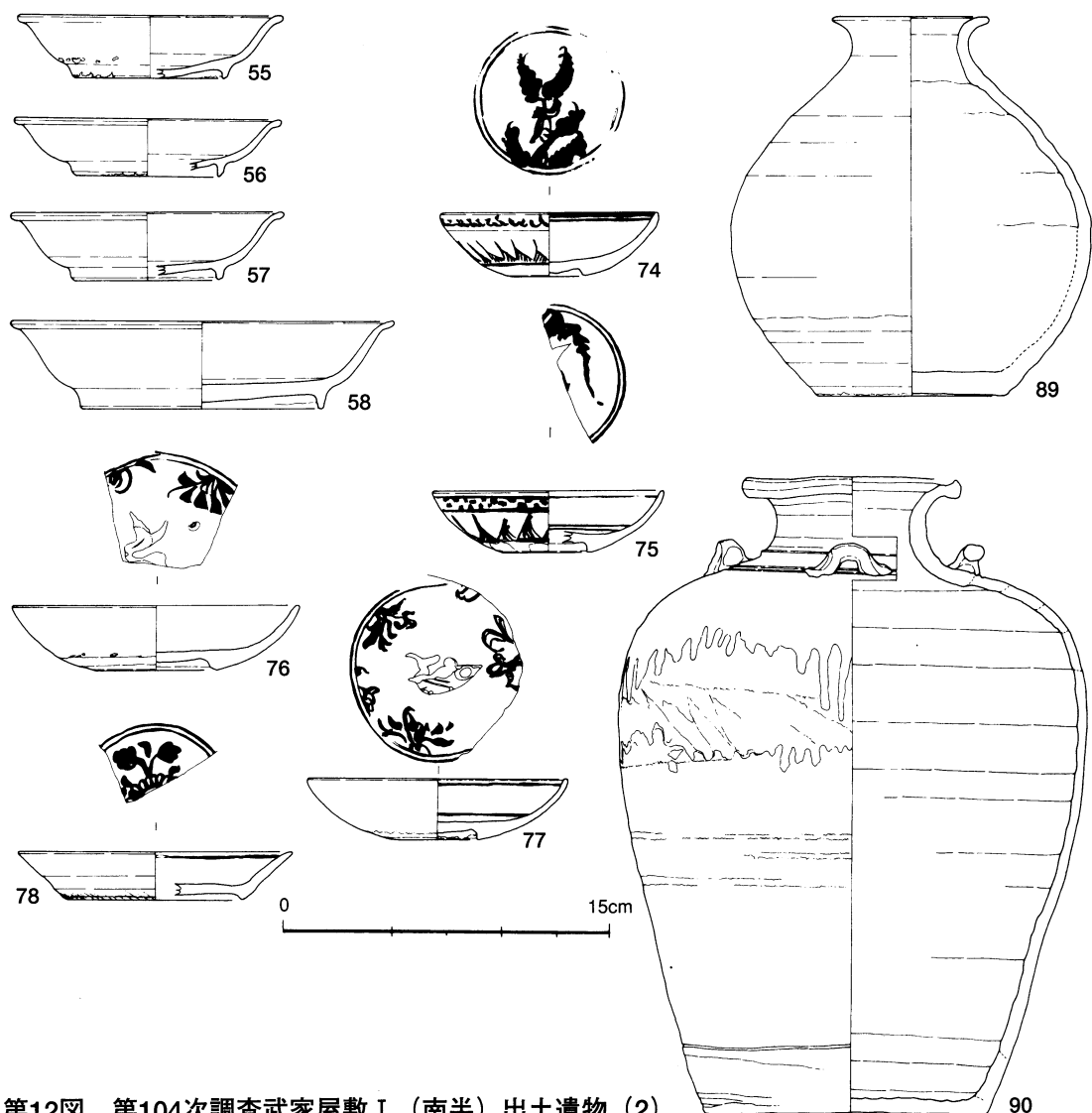
第11図 第104次調査武家屋敷 I (南半) 出土遺物 (1)

立、鍬形台、鞋、紐通しの環座等々が出土しているが、甲冑の形態がある程度把握できる状態で、まとめて出土した例はない。更に木製品では植物文を描いた漆器手箱蓋が出土し、当初金箔押しと思われたが、漆膜の分析の結果、沈金技法による可能性があることが判明した。また、曲物蓋に「背腸」を墨書する製品が出土したり、陶磁器でも唐物荘厳とされる青磁、青花白磁の優品等々が出土している。

こうしたことから、第104次調査「武家屋敷Ⅰ」の住人は、朝倉館の正面に居館を構えることが許され、かつ陶磁器類に示されるように骨董品を多数所持し得た、家臣としての位置付けの高い武将、即ち当初予想した5代城主義景の舅である斎藤兵部少輔の居館である可能性が限りなく高まったと考えられる。以下、個別の解説に移る。

<武家屋敷Ⅰ南半>

越前焼 本調査区においては、カメピット等の遺構がなかったせいもあって、大甕のまとまった破片は少なく壺、播鉢ともに少片の出土が大半であった。出土した遺構は東西溝、石積施設、井戸等が大半であった。(89)は器高34.8cmを測る徳利型の壺である。口縁部から肩に



第12図 第104次調査武家屋敷Ⅰ(南半)出土遺物(2)

かけて自然灰釉がたっぷりとかかる。

**土師質土器** 今回の調査区ではカワラケの一括廃棄、土器溜り土壌は検出されず、主として溝、石積施設、下層遺構面からの出土であった。

第11図(6、8～12)はいずれも下層礫混じり整地土の皿である。礎石建物SB4786の東側で、上層は水田畔によって削平を受けている。内面見こみに見られる「2」の字ナデから、D類に含めてよい皿である。しかし見こみの圏線は底部から口縁部へ立ちあがる腰の部分に施されるのではなく、見込みのなかに割り込んでいて通常より圏線の径は小さい(5cm前後)。かつ、この圏線はいわゆるD類の場合は強くナデ回す関係で明瞭な沈線となるのが普通であるが、該資料はいずれも明瞭な沈線とはならず浅い。このことはD類「2」の字ナデ手法を基準とする一連のグループでは、バリエーションのひとつとして峻別されるべきであると思われるが、新たな区分を設定するかどうかは今後の資料の増加を待って検討したい。

**瀬戸・美濃焼** (15)は口径8.7cm、器高4.8cmを測る半欠の小天目碗である。高台は浅く削り込まれ、輪高台となる。(16～19)は口径11.5～13cmの通有の鉄釉碗で、口縁部は鶯口状に外反する。(20)は鉄釉把手付水注である。器高7cm、口径6cmで胎土、焼成ともに良好。黒褐色の釉調も安定している。(22～24)は鉄釉碗高台である。(25・26)は大海型鉄釉茶入である。(28)は徳利型鉄釉壺の底部破片。(29)は灰釉皿、(30・31)は同碗破片である。(32)は灰釉茶入、(33)は同折縁大皿、(34)は低い輪高台を有する皿破片である。

**中国製陶磁器** (35・54)は口径25.2cmの青磁鉢である。口縁部端は受け口状に立ち上がる。同タイプが第42次町屋で青花白磁盤、同小皿10枚セット一括品供伴遺物に見られる。(36)は筒型の青磁器台で口径8.6cm、器高21.2cmを測る。鐔状張出部分の径は16.2cmを測る。器面全体にヘラ描きによる草花文が描かれる。底部は畳付部分が水平とならず、外面に斜行する。研磨された形跡が見られ、一乗谷では初出の例である。(37・50)は口径10cmの青磁輪花皿である。(38・39・45・46・48)は青磁稜花皿である。(40)は菊皿である。(41)は口径46.4cmを測る青磁大皿である。口縁部は稜花型とならず、平縁である。類例が新安海底文物に見られる。(53)も青磁大皿である。(51)は碁筒底の内湾する青磁皿である。(52)は獣型の把手を有する青磁壺の蓋である。

(55～57・71・72)は端反の白磁皿で口径は12～13cm前後である。(58・73)は同端反皿で、口径17.6cmを測る中型の皿である。(60・65～67)は第102次調査概要<sup>(注1)</sup>でも紹介したもので、菊花型または稜花型の口縁を有する、胎土のあまい皿である。高台は削り出して露胎となる。細かな貫入が見られる。(62・63)は割高台の白磁皿で、前者は釉調も良好で胎土は白い。後者は卵白色を呈し、胎土はあまい。(68～70)は高台裏に青花の銘を有する皿である。

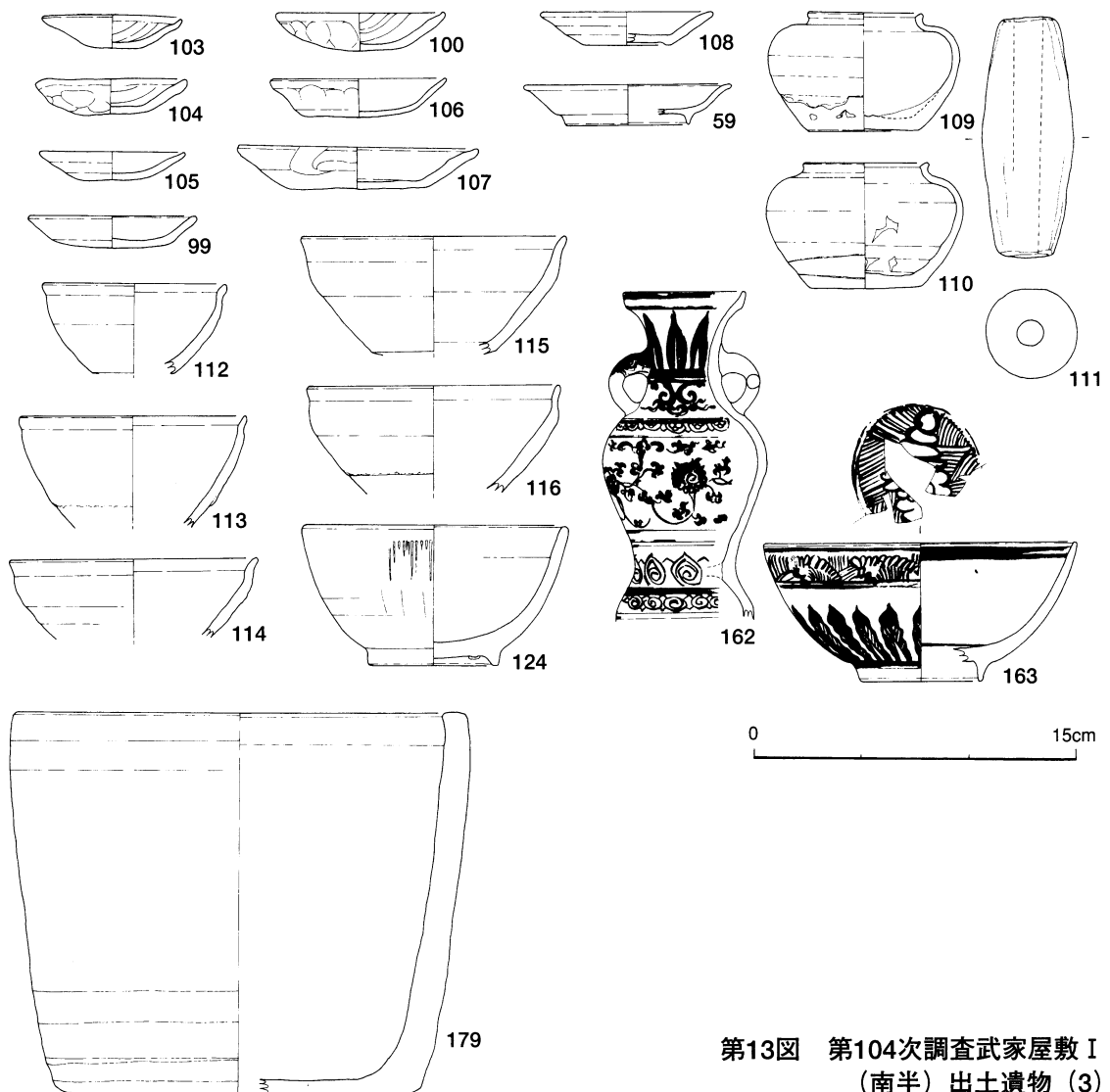
第15図に示した白磁は口禿タイプの皿で、(101・102)は第104次出土、他は第102次で出土したものである。この種の口禿皿は第51次調査(医者の家)でまとまって出土しており、その後の検討により、朝倉館、第31次、第78次調査区等々の調査区でも確認されている。淡いブルーの色調で胎土も緻密、固く焼き締まったものと、卵黄色もしくは淡白な色調で胎土

注1 朝倉氏遺跡資料館編1998『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査概要(30)』

もあまく、貫入が目立つものがある。形態上では無高台で腰折れタイプと、有高台で内湾するものがある。今回例示した資料は第102次の無高台腰折れタイプと、第104次の有高台内湾タイプのもの(102)に加え、更に小杯ないしは猪口の形態を有する、別タイプのもの(101)がみられ、注目される<sup>(注2)</sup>。

(90)は器高58.6cmを測る黒褐釉の四耳壺である。胴部最大径は43.2cmを測る。溝SD4081～4803とその周辺から集中的に出土した。口縁部から肩、胴部にかけて黒褐釉がかかる。底部は平底である。一部は2次加熱により釉調がかせて、赤変もしくはくすんだ褐色を呈する。口縁部は外に開いて受け口状の浅い凹線が巡る。

(74～77・80・88)は碁笥底の内湾する青花皿である。(81・82・85)は碗である。(82)はマントーシタイプで、高台裏に「大禧年造」銘がある。(78・79)は同一個体とみられ、外面青磁釉の青花皿で、見込みに草花文が描かれる。(84)は端反の玉取り獅子文皿。(86・87)は青花杯破片である。



第13図 第104次調査武家屋敷I  
(南半)出土遺物(3)

注2 この種の口禿皿は類例が極めて少ない。森本朝子、柴田圭子両氏のご教示によれば博多、

道後湯築城で出土例があるのみである。小杯の出土は今回一乗谷の初出例である。

朝鮮製陶磁器 (21) は黒褐釉の平碗である。(92~95) はいわゆる焼締陶器の壺である。

木製品 挿図2は曲物蓋で径6cmを測る。檜板を2次加工して蓋に使用した痕跡が伺える。1面に墨書で「背腸」と書かれている(注3)。海産の珍味に「このわた」、「せわた」が知られるが、

背腸

黒漆塗箱

卷首図版(下段)に示した黒漆塗りの資料は溝SD4081で出土した、縦21cm、横9cm、高2.5cm、厚さ2.3cmの箱の蓋である。側面に竹釘穴がのこる。前面に黒漆が塗られ、金箔で表面一杯にあざやかな「瑞果文」が描かれる。化粧箱か硯箱とみられ、極めて作りが良く、遺存度も良好である。内面は火災によるものか、焼け焦げている。表面に描かれる瑞果文はいわゆる沈金技法によるもので、樹種は中国東南部原産の常緑小高木の「龍眼」もしくは同南部原産、常緑高木のムクロジ科「荔枝」であろうと考えられる(注4)。

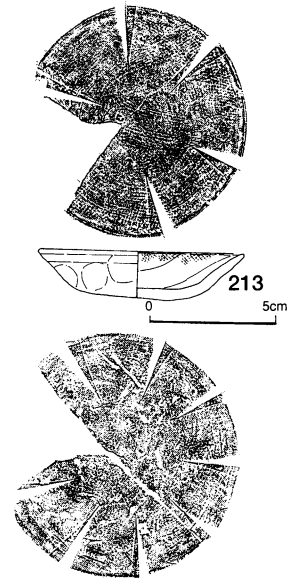
<武家屋敷I北半>

越前焼 (179) は口径42.7cm、器高35.4cmを測る水指である。生焼け状態で全体の色調は、胎土の鉄分の吹き出しにより淡い褐色を呈する。口縁部端及び底部は磨耗痕がみられ、生地肌が露出している。(249) は口径56.4cm、器高25.8cmを測る鉢である。これも生焼け状態の褐色を呈する。口縁部は外反せず内屈する。

土師質土器 第13図(100、103~108) は石積施設SF4813出土の皿である。(99) は溝SD4809出土で、口径7.8cmを測る古手の皿である。色調は肌色を呈する。見込みを広くとり、口縁部は小さくつまんで腰折れタイプとなる。一乗谷ではごく少量見られるが(注5)、分類基準の8タイプには属さず、全く別成形の皿である。(111) は陶鍾である。

瀬戸・美濃製品 (112~116) は鉄釉碗である。(117・118) は同高台破片。(119・120) は同皿である。前者には高台裏に輪土鎮痕を残す。(109・110) は完型の鉄釉茶入である。それぞれの肩部最大幅は8.8cm、9.2cmを測る。ほぼ同型の大海型の茶入である。(122) は同茶入破片である。2次火熱により、釉がかせている。(121) は耳付き小壺破片である。(123) は祖母懷壺型の四耳壺破片である。(124) は灰釉碗である。復元口径12.4cm、器高6.6cmを測る。櫛描蓮弁文がみられる。(125) は線描蓮弁文の碗である。(126) は天目型の灰釉碗で、胴下半部は露胎である。(108) は復元口径8.2cmを測る小皿である。(128) は外反する腰折れタイプの小皿である。(132) は香炉、(129・130) は同一個体とみられる折縁口縁の鉢である。

中国製陶磁器 (133・134) は青磁線描蓮弁文碗である。(139・143) は青磁碗底部破片で、前者は見込みの釉が掻き取られて露胎となっている。(136~137) はいずれも外面に蓮弁文を有する皿である。(137) の蓮弁文は半肉彫りで口縁部は鏝状に折れて



挿図1 カワラケ拓影図

注3 本資料館主任佐藤 圭の判読による。

別の範疇を設定する必要がある。

注4 植物文の樹種同定については藤原武二、若杉孝生、の各氏よりご教示を賜った。

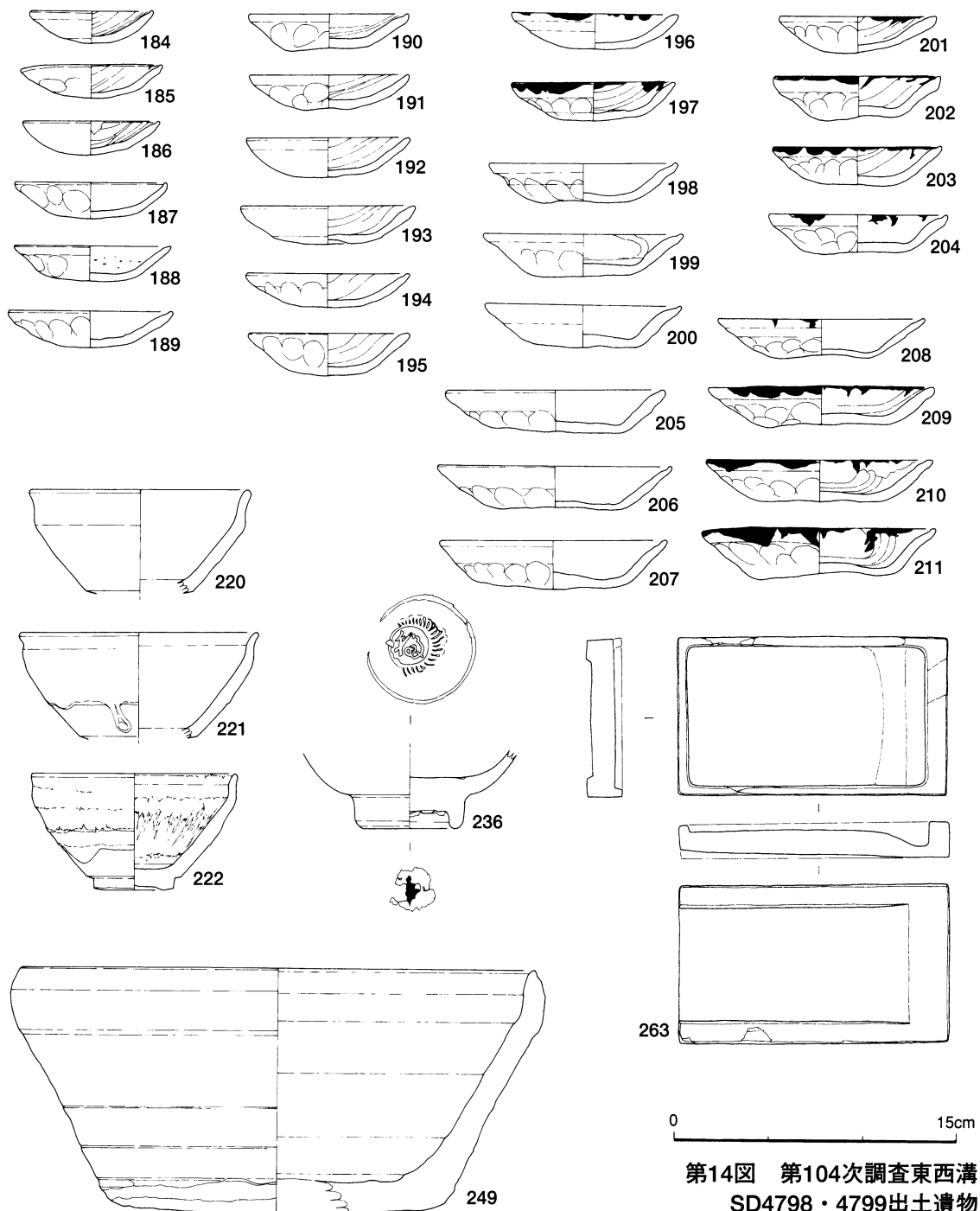
注6 上海美術出版社編1983『中国陶磁全集19景德鎮民間青花磁器』(図版112)

注5 この手のタイプは一乗谷の城下町成立以前の製品と考えねばならず、今後の分類基準に



外反する。(138・142・144・145)は大皿もしくは盤の破片である。(59)は復元口径9.4cm、器高1.9cmの半欠の白磁端反皿である。釉調は良好で、高台畳付きは露胎である。(146・151～153・156)も同端反皿である。そのうち、(153)は釉調が暗灰色を呈し、貫入が走る。(147)は同菊皿の破片、(148)は小杯である。(149・150・154)は高台が切り高台となる白濁釉、胎土があまく陶質の白磁皿である。(159～161)は内湾する中皿破片で、外面に暗文風の草花文が描かれる。釉調は全体に青味がかかる。(162)は青花蓮華唐草文双耳瓶で、復元口径5.4cm、胴部最大径7.4cm、器高約15.0cmを測る。明代嘉靖期(16世紀前半～中頃)の製品とされている。類品が景德鎮陶磁館所蔵品に見られる<sup>(注6)</sup>。(163)は復元口径14.6cm、器高

青花蓮華唐  
草文双耳壺



第14図 第104次調査東西溝  
SD4798・4799出土遺物

## 玉壺春型の壺

6.4cmの芭蕉文碗である。見こみはやや浅い感があり、釉下のコバルトも黒ずんで滲んでいる。(167~170・174)は青花碗破片である。(164~166・171~173)は皿破片である。そのうち、(164~166)は端反タイプ、(171・172)は内湾タイプである。(176~178)は釉下に暗文の草花文がみられる鶴首の壺破片である。同一個体と見られる。(250)は玉壺春型の壺である。胴部は扁平なスタイルである。器型全体の復元には至らなかった。底部の高台径は推定9cmである。図中右上の蓮華唐草文の破片は別個体と見られ、玉壺春瓶と同形態の八角形水注の胴部破片に相当しよう。これに形態、文様の酷似する青花花卉文水注が故宮博物院所蔵品のなかに見られる<sup>(注7)</sup>。

(180~182)は褐釉の壺破片である。器壁の厚さは4~5mm前後と薄い作りである。胎土は緻密で黄褐色を呈する。(183)は黒釉壺破片である。

### その他(甲冑、兜鍬)(挿図3)

今回、山際武家屋敷I北半部分より甲冑及び兜鍬と見られる遺物が出土した。第3図調査区遺構模式図の点線で示した範囲が出土した位置であり、その拡大図を第5・6図で示した。甲冑は小破片となって拡散している傾向が見られた。しかしその中心はSB4790の北側の区画であり、鍬や甲冑が表土・床土下遺構面より近接して出土した。これまでも甲冑小札については、単体で鉄製のものが朝倉館、平井地区、赤淵・奥間野地区等でも少量ずつ見られた。また、平井地区「ショーゲドン=鰐淵将監跡」の井戸からは、今回のものと同様の皮製もしくは和紙製と見られる漆塗り小札の小片が出土している。

特に第5・6図の土壙SK4819脇では小札が4段分、裏返し状態で見つかった。横幅33~34cm、一段分の縦幅7.3cmで、各段はほぼ規格が同じであり肩にあてる大袖部分と判断される。また、この位置より更に東に寄った溝SD4804・4805付近でも同様の破片が出土しており、こちらは横に彎曲し、段の幅も大袖より狭いことから草摺部分と判断された。小札の芯材は腐食したのか、空洞状態になっている。表面を黒漆で固めており1枚の札幅は1.8cm、横に37枚を重ねて1段分としていることが判る。土壙SK4819の西側では2~3段分の大袖が折り重なって出土した。こちらは黒漆塗りの上に朱漆で「×」印を連続して書き込んでいる段がみられ、いわゆる「菱縫<sup>ヒシヌイ</sup>」と見られることから大袖の最下段分に相当しよう。

兜鍬は2段分が、やはり、これも裏返しの状態で石列(溝か)SX4835に接して発見された。兜鍬本体部分は、付近を精査したが見つからなかった。小札は鉄製で黒漆塗である。錆が激しく附着しており、1枚分の正確なサイズは測定困難であるが、概ね甲冑のものと同規格と見られる。こうした一括出土例は一乗谷では初出のものである。

これまでも、昭和53年に京都市「法住寺殿」遺跡で、平安時代末に位置付けられる甲冑5セット分が発見されて話題となった例がある<sup>(注8)</sup>。また平成10年の秋田城跡での古代甲冑の出土例<sup>(注9)</sup>、或いは栃木県小山市祇園城での鉄製小札大量出土例<sup>(注10)</sup>、沖縄県勝連町平敷屋古島遺跡での鉄製小札のまとまった出土例<sup>(注11)</sup>などが知られる。戦国時代においては同様の一

注7 中沢・長谷川編1995『中国の陶磁8 元・明の青花』(P.104図版27)等

注8 法住寺殿遺跡発掘調査報告 なお、京都文化博物館植木 茂氏より、同遺跡出土甲冑について貴重なご教示を賜った。

注9 秋田城跡調査報告

注10 国立歴史民俗博物館小野正敏氏、小山市教育委員会秋山隆雄氏より資料提供及びご教示を賜った。

注11 沖縄県文化課當真嗣一氏より資料提供及びご教示を賜った。

括出土例は見られないことから、今後の武器・武具研究上、大変貴重な発見であろうと思われる。

### 東西溝その他

越前焼 (249) は口縁部が内湾気味に立ち上がる鉢で、口径17cm、器高12.8cmである。通常、この手の鉢は直線的に外反するが、該資料は内側に押し曲げられている。

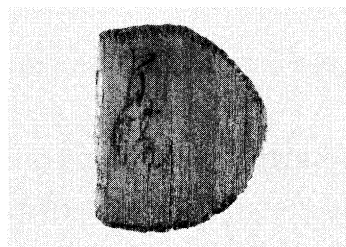
土師質土器 特に東西溝SD4798、4799では完型品の出土が目立った。第14図(184~211)は東西溝SD4798、4799出土の皿である。概ねC1、C2、D2類を基本とする。

挿図のカワラケ(213)は口径8.2cmを測るC2類に含まれる皿で、口縁部から見こみにかけて大きく「の」の字ナデ調整がみられる。興味深いのは、口縁部の周りに布圧痕が付着して残っていることで、目のあらい麻布等で口縁部を押えている様子が顕著に観察できる。通常、B類の皿以外はこうした圧痕はナデ調整により遺さないのが普通であるが、乾燥が速くて消えなかったのか、布目が残ってしまった好例と言える。カワラケのナデ調整は皮もしくは布を使用したとの推測がなされているが、C類にも布をナデに使用した根拠を示す貴重な資料である。

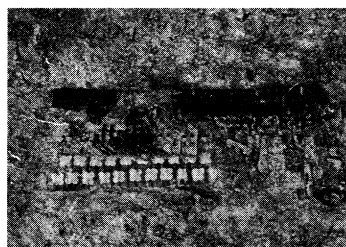
瀬戸美濃製品 (16・220・221・223~226) は鉄釉の碗である。(227)は壺底部片で、内面に2次火熱による(228)は茶入の低部片である。(229・230)は同一個体の徳利形壺破片である。釉調は暗茶褐色で、胎土はボソボソした、いわゆるモグサ土である。(232)は灰釉碗底部である。(233・234)は同片口鉢、(235)は香炉口縁部破片である。また、(231)は内湾する黄瀬戸の皿と見られる。2次火熱により、かせており表面はザラザラしている。(240・243)は青磁輪花皿で、釉調は暗青緑色を呈する。

中国製陶磁器 (236)は無文の青磁碗で、高台裏に漆書による銘が見られるが判読は難しい。内面に壽字文のスタンプ文が見られる。(237)は青磁酒海壺底部片、(238)は同牡丹浮文壺の胴部片である。(245)は白磁杯の底部である。内面見込みは蛇の目の搔取りが見られる。(246・247)は白磁端反皿で、高台裏に染付による圏線が巡る。

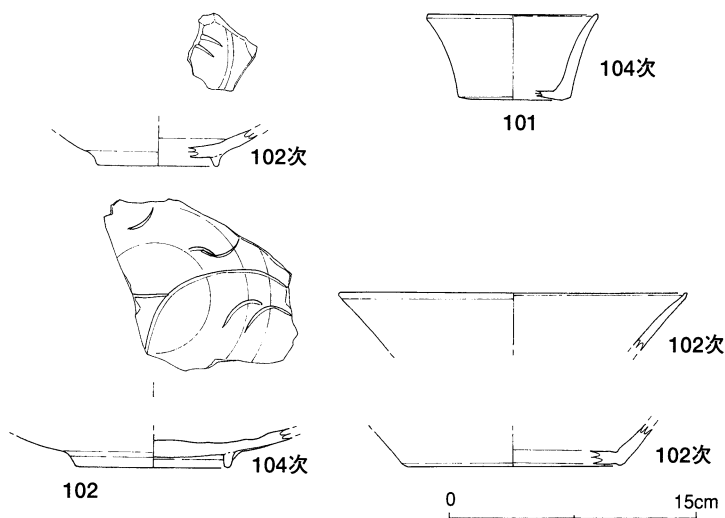
(222)は復元口径10.8cm、器高6.0cmの鉄釉碗である。高台裏に漆書が見られるが判読は困



挿図2 曲物蓋「背腸」



挿図3 甲青出土状況



第15図 白磁口禿皿他



難である。胎土は明るい灰色を呈し、固く緻密である。釉調は安定しており、全体に茶褐色を呈する。かすかに禾目が見られる。

石製品 (263) は硯である。縦14.4cm、横幅8.4cm、高1.8cmを測る。遺存度は良好でほぼ完型である。石製品にはこの他に笏谷石製の溝蓋石、井戸枠、門階段石等々の建築関連部材がある。又バンドコ、鉢、硯小片もあるが紙幅の都合で割愛した。(南洋一郎)

## 4. その他の調査

### 現状変更許可申請に伴う奥田道雄邸新築工事の事前調査 (第105次)

本調査は、福井市城戸ノ内町奥田道雄氏の宅地造成に伴う事前調査として実施した。期間は平成11年8月23日から9月2日までの10日間実施した。発掘面積は120m<sup>2</sup>であった。

本調査地の東側は、馬出の平坦地の南端にある「小城」跡の斜面へとつながっており、城戸ノ内集落を南北に走る生活道路からは少し奥まったところに位置する。現地目は畑地であるが、かつて奥田家の住居が建っていたとの聞き込み結果から、ある程度遺構の攪乱状態が予想された。

発掘の結果、地割に沿って東西に軸方位を有する建物跡が検出された。第16図に示すように、調査区の設定に制約があったため、建物の全体の規模は把握できなかったが、ほぼ調査区一杯に広がっていることが確認できた。

**SB4850** 耕作土直下で検出された礎石建物で、概ね東西に棟通りをもつものと判断されるが、前述のとおり、建物の全体は発掘できなかった。南側に便所、タメマス等があり、東側には通路SS4854が併行している。上・下層で2時期が確認されるが、盛土による整地はうすく、時期差も短いものと判断される。SK4852、SX4856～4859は上層に併うものである。

**SX4856** 人頭大の河原石を並べた石列であるが、礎石建物に伴うものと判断される。

**SK4853** 恐らく木桶を埋め込んで、その周囲に黄色粘土を貼って水漏れ防止とした便所遺構と考えられる遺構である。石列SX4856の下層で検出された。木桶は抜かれたものか、遺存していなかった。

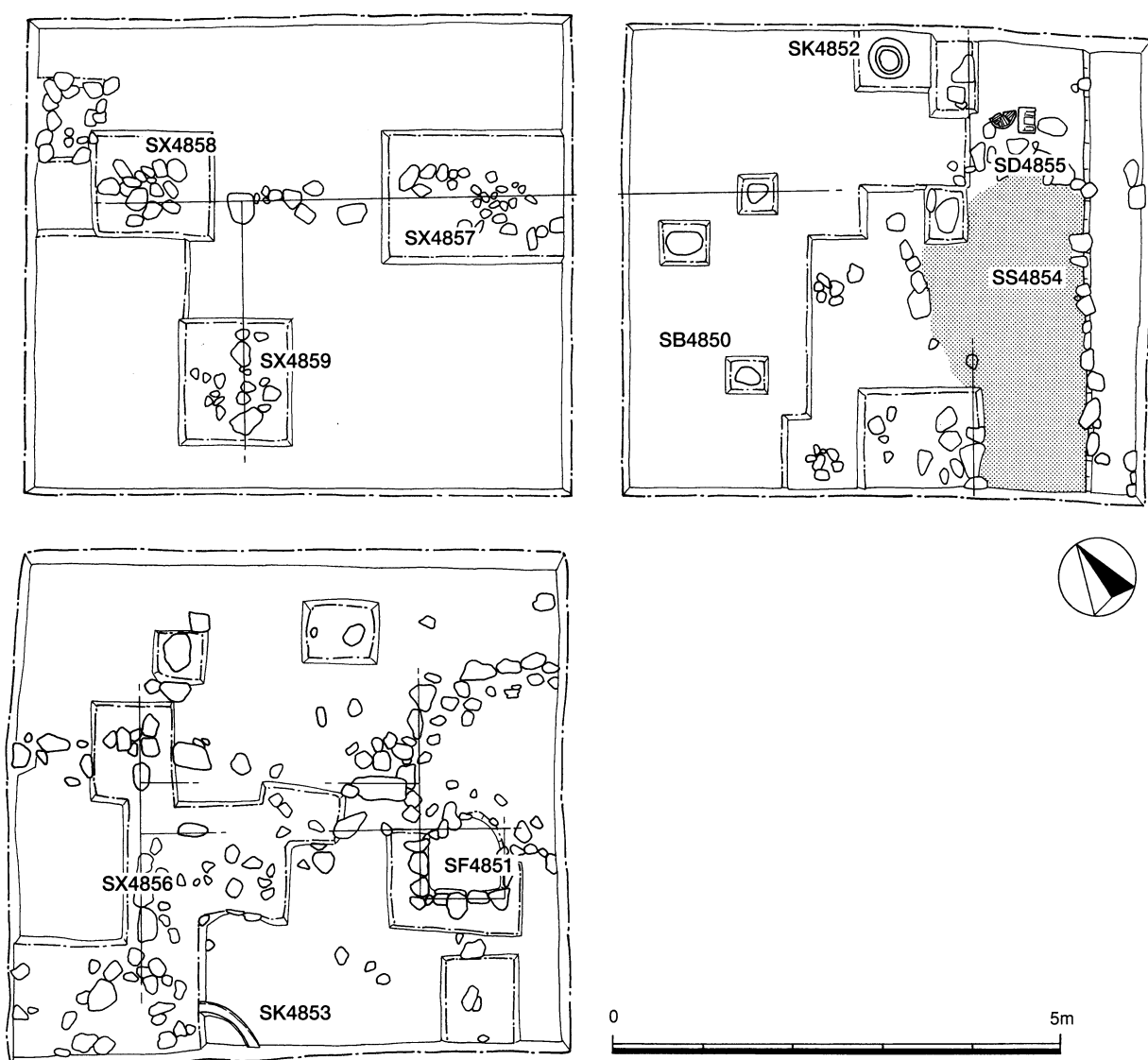
**SX4857～4859** 礎石建物に伴う遺構である。礫を集中して固めたようにみえることから、礎石の根石とも考えられる。

**SS4854** 調査区の東端で検出された道路または通路と考えられる遺構である。建物に並行して南北に走る。幅は約1.2mである。この通路の更に東側は溝状に一定の幅で落ち込みが検出された。後世の攪乱が伴っており、タイル片や現代瓦、木片等が充満していた。

**SX4855** 通路の北寄りで検出された石列であるが、排水溝とも考えられる。笏谷石製のバンドコや越前焼が出土した。

**SK4852** 通路SS4854の北端西側で検出された越前焼の甕埋設遺構である。口径、器高、肩から下がほぼ地中に埋められていた。

**SF4851** 長辺m、短辺mの石積施設である。2段分が検出された。東、西、南辺はよく残っていたが、北側は攪乱によるものか石が抜かれていた。



第16図 第105次調査遺構図

瓜割清水の環境整備に伴う事前調査（第106次）

本調査は、環境整備に伴う計画調査のうち、城戸ノ内町字瓜割流にある瓜割清水の整備に伴う遺構確認調査として実施した。期間は平成11年11月2日から12月1日までの30日間実施し、発掘した面積は225㎡であった。

調査地の東側斜面上には南陽寺の高台があり、西側には一乗谷古絵図で、朝倉氏重臣の三田崎備中守屋敷跡と記される場所にあたる。又すぐ東側が瓜割清水が隣接する場所でもあることから、この清水に関連する遺構、又は付随する遺構が検出される可能性が指摘されていた。又瓜割清水は朝倉氏滅亡後も地区住民の手によって守られてきた飲料用の涌水池となっており、調査によって汚濁、枯渇の影響が出ないよう、善後策を図りながら調査を進めた。

発掘の結果、第17図に示すように地割に沿って調査区のほぼ一杯に建物跡が検出された。  
 SB4871 約12.5m、東西約12mの規模を有する礎石建物で、SS4877の通路が東西方向に取り

付いていることから、南に入口を有し、南北に棟方向をもつ建物と判断される。但し、建物の一部は通路上に張り出すように延びていることも考えられる。

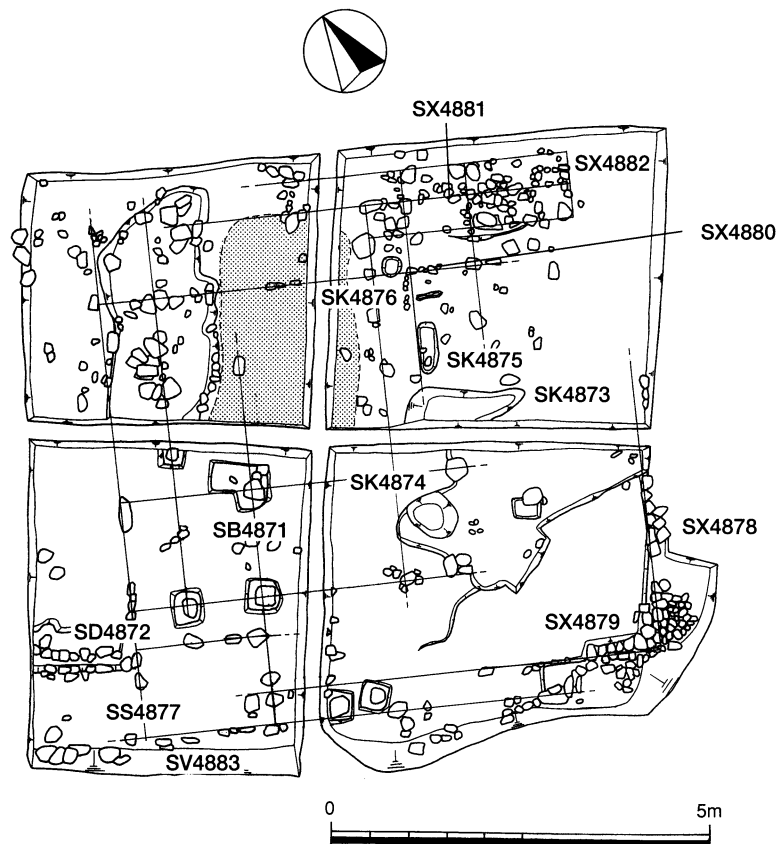
**SX4878** この建物に接して東端で検出された石敷遺構で、南東側から廻り込むように東に延びている。すぐ東隣が瓜割清水になっているので、或いはこの石敷が清水の護岸遺構と一体のものかも知れない。

**SS4877** SB4871に接して東西方向に延びる通路である。幅は約2mを測る。よく叩き締められた砂利敷通路遺構である。この通路の更に南側は石垣SV4883である。

**SD4872** 通路SS4871に並行して延びる敷地内の排水溝とみられる溝で、2.5m分検出された。

その他に、土壌SK4873、4874等も検出されているが、いずれも後世の攪乱土壌と考えられ、中からは近世、近代の土瓶、タイル片、瓦片が大量に遺棄されたかたちで集中して出土した。

(南洋一郎)



第17図 第106次調査遺構図

## 5. 環境整備

平成11年度は中期10ヵ年計画に沿って、平成7・8年度に発掘調査を実施した御所・安養寺跡<sup>(注12)</sup>の遺構復元整備工事と、修景工事の一環として朝倉館前園路排水溝にかかる暗渠の整備工事を実施した。

### 御所・安養寺跡遺構復元整備工（第18図 PL. 11・12）

御所・安養寺跡については、平成7年と8年の2ヵ年に亘って発掘調査を実施したところであるが、それ以外にも東側山斜面には御所、安養寺両側に谷が開いており、いくつかの平坦地が段上に遺存している。いずれも寺院に関連した坊跡または塔頭と考えられる。特に安養寺跡の谷筋には、観音像を含む石仏が集中して遺存していることは「石仏銘文集成<sup>(注13)</sup>」によっても既に明らかにされている。又、この谷の奥を少し上ると、「池跡」と称される平坦地があり、これも安養寺に関連した遺構が遺存しているものと考えられる。

安養寺跡は山側から県道側に向かって3段の段差があり、特に山側の上段と中段の間には水田の用水工事でU字溝が設置され、帯状に寸断された状態であった。天端での溝幅は4～6mとなり、これをそのまま残すと面として全体の整備に大きな支障が出ることが予想された。しかし、このU字溝は現在も東新町の水田耕作の用水路としてに機能している用水路であるため、埋め戻しによる廃棄はできないことから、蓋をかけて暗渠とし、その上を盛土することにより全体の遺構配置が図れるよう配慮した。

上段礎石建物SB4586は溝SD4572に並行して3石が検出されていることから、10m四方の規模で復元配置し、レミファルト舗装表示とした。SX4617は溝蓋石として復元表示することとし、凝灰岩製板石を置いた。

中段では石列SX4606及びSB4584の検出状況から同一の礎石建物として復元的に設置し、これに重なるように検出されている柱列SA4581も、時期差をもたせて同時に表示することとした。柱列は一旦検出時点で見つかった柱痕を抜き取り、同規模の複製丸太材を差し込んで据え付けた。中段から下段に直線的に続くと思われるSD4574とSD4577は一本の溝として復元した。同中段で南北に延びる石SV4619は、下段との遺構に併せて復元し、SX4605は中段と下段の出入り用階段として凝灰岩製板石を置いて復元した。

又遺構保存の観点からは、谷からの浸水が梅雨などの降雨時には一時的に川となって下段に流れ込むため、排水機能に比重をかけ、前述の水田用U字溝を整備地区の排水溝として活用することとした。上段2ヵ所、中段5ヵ所にネトロンパイプを埋め込み、それぞれU字溝及び整備地外側に流れ込むように配置した。

御所跡については、調査概報でも既に報告されているように、指定以前の一乗地区区画整理事業によって削平、攪乱を受けており、遺構の遺存状況は決して良くなかった。全体とし

注12 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編1996

『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡1995』(27)

同 1997

『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡1996』(28)

注13 朝倉氏遺跡調査研究所編1975『一乗谷石造遺

物調査報告書Ⅰ——銘文集成』

ての遺構の配置状況、性格の見極めが困難であったため、比較的遺構の遺存状況が良好で、配置状況が把握できる安養寺跡とは区別して見学者の憩い空間と位置付け、主として植栽と芝張りによる修景工事を実施した。

#### 朝倉館前園路橋整備工 (PL. 13上)

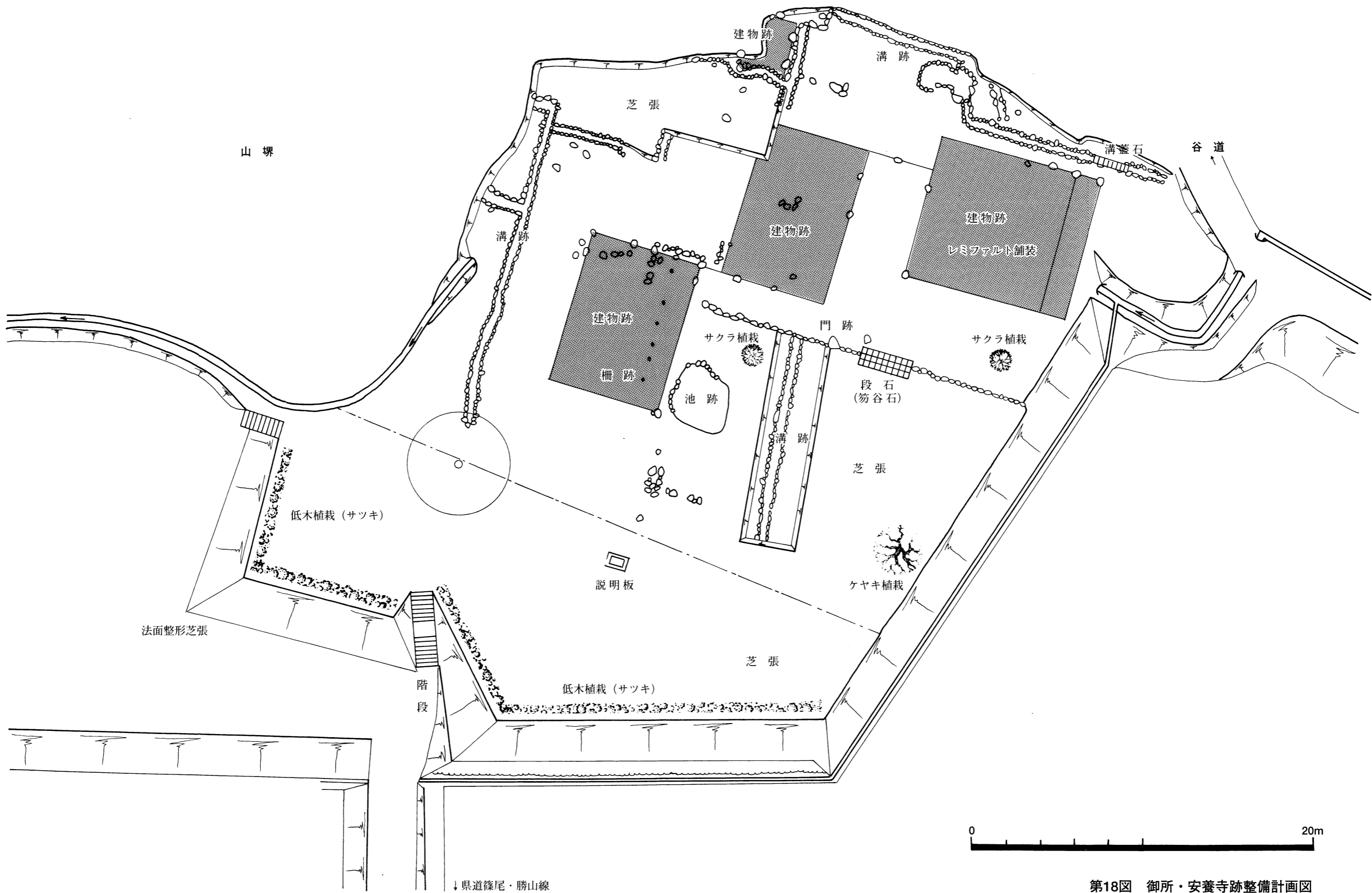
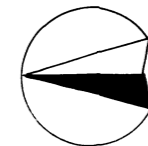
朝倉館前の園路整備については、平成2年度に朝倉館外郭修景工で外濠に沿う園路、砂利敷駐車場の芝張り植栽及び園路整備を実施し、芝生広場と朝倉館、便益施設（公衆便所）等をつなぐ散策路として修景整備を実施している<sup>(注14)</sup>。

その後10年が経過し、朝倉館外濠の用・排水のために設けられていた、北西隅及び南西隅のU字溝による暗渠が2ヵ所ともに土圧のために潰れて土砂が溜り、傷みが進んでいた。そこで、この修復を兼ねて一乗谷川へ向かって延びる排水溝の幅に合わせて溝幅を広げ、U字溝による暗渠は廃して開渠とし、その上に園路橋を架けることとした。これによって、北西隅では春先の雪解け水や、夏の梅雨期あるいは台風シーズンの雨水の増加にも耐え得る排水機能となった。また南西隅でも同様の規格、規模で橋を架け蛇谷、諏訪館、及び新御殿側からの通行がスムーズになるよう、園路勾配にも配慮した整備を施した。また一乗谷川の取水溝からの水を、水量調節板を設けて効率良く外濠に引き入れることができるようにした。

(南洋一郎)

---

注14 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編1991『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡1990』(22)

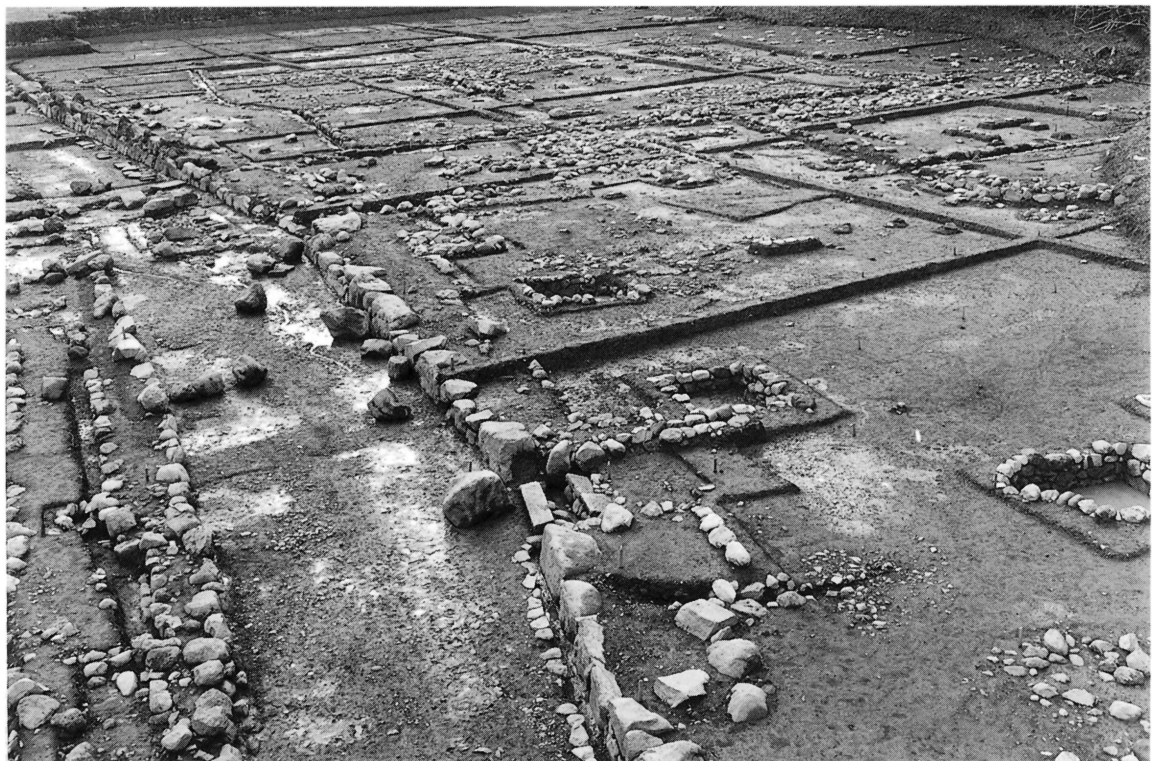


第18図 御所・安養寺跡整備計画図

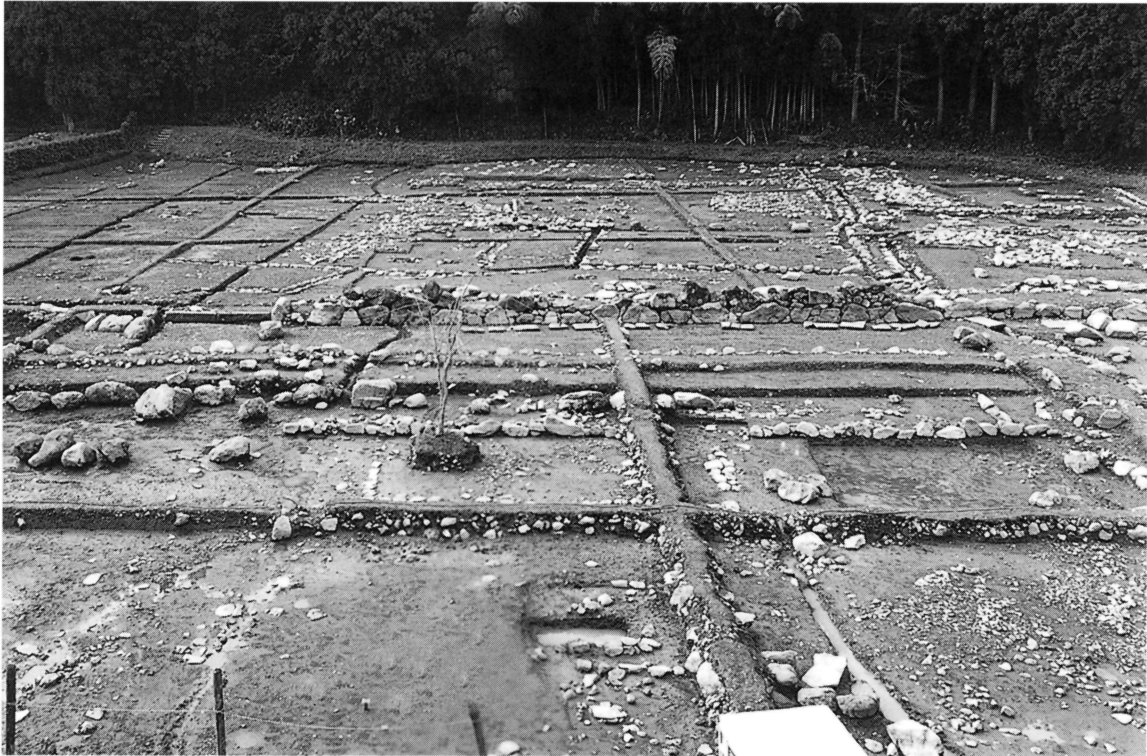




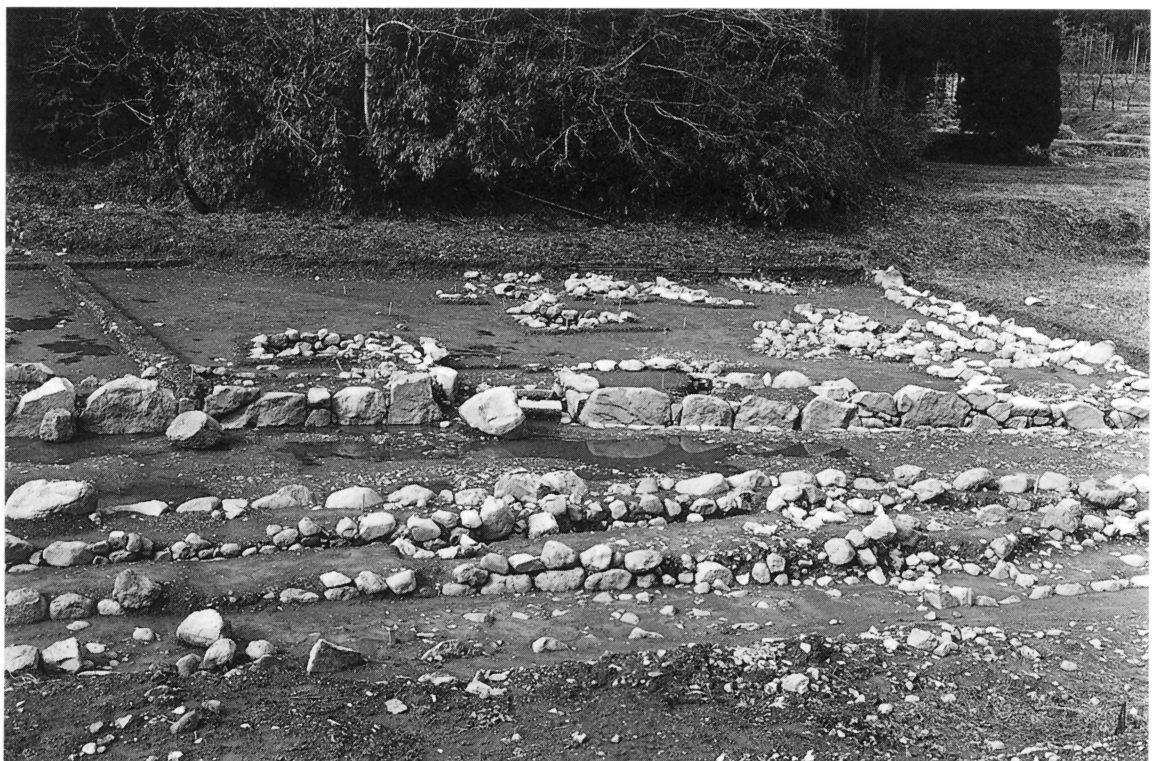
調査区全景（南東から）



同（北から）



調査区南半 (東から)



調査区北半 (東から)





礎石建物SB4790（南から）



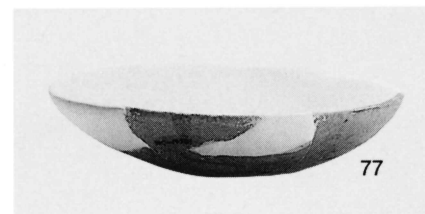
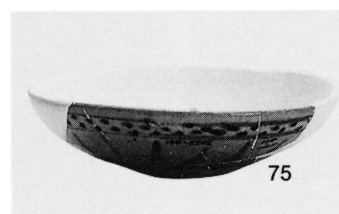
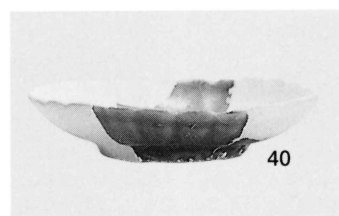
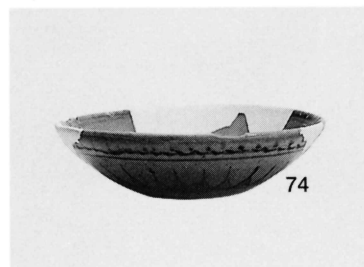
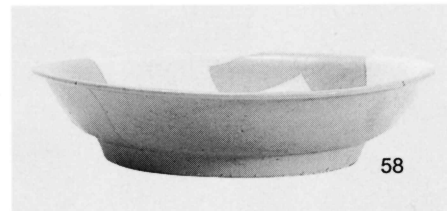
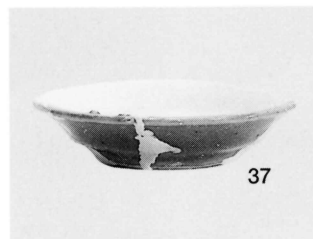
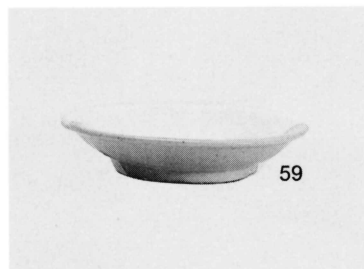
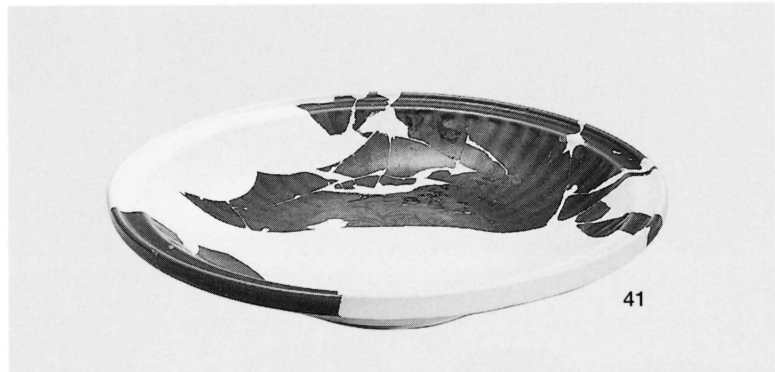
礎石建物SB4786（南から）



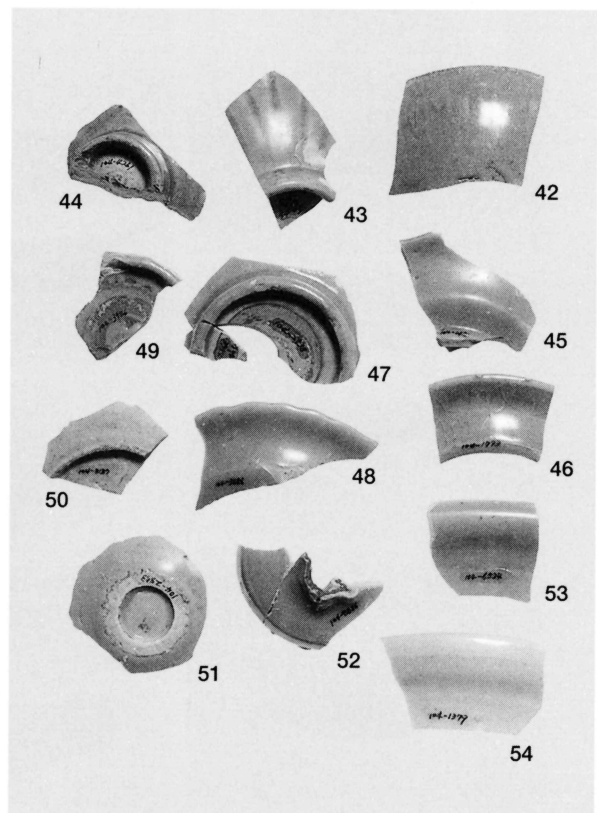
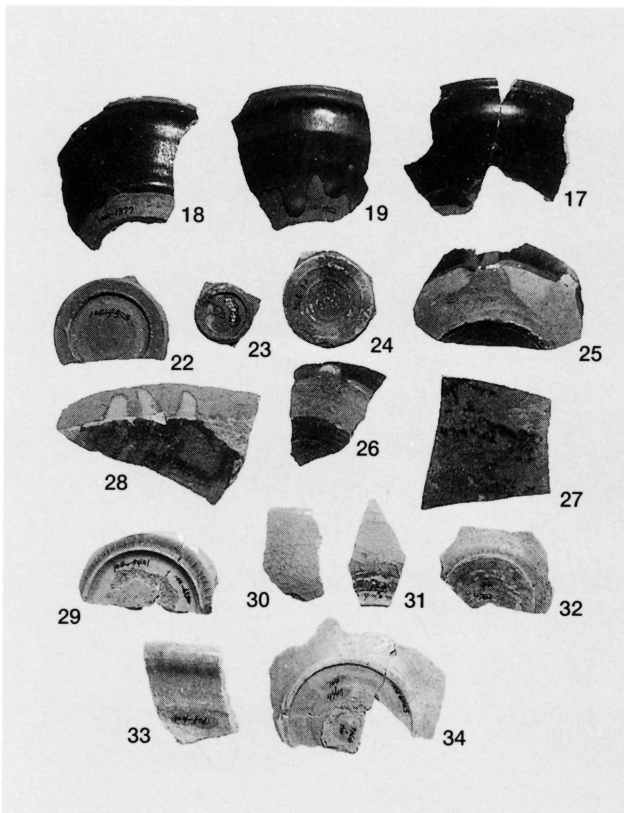
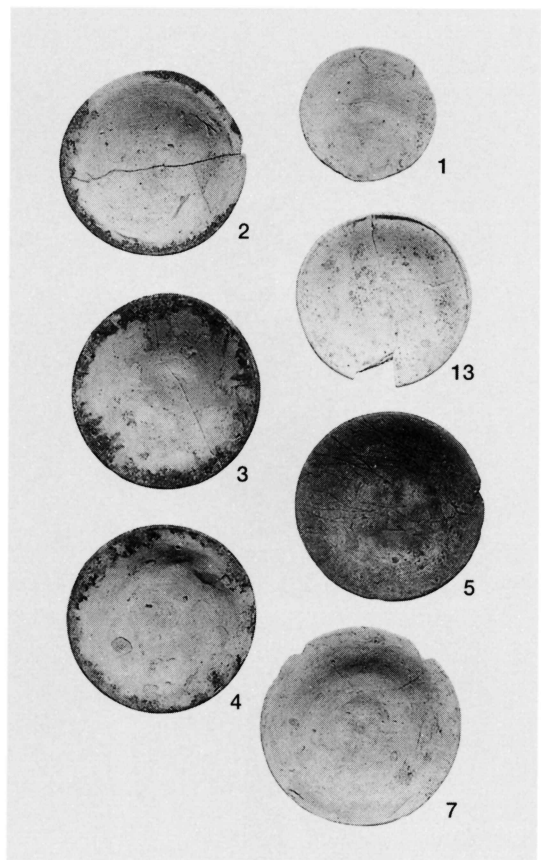
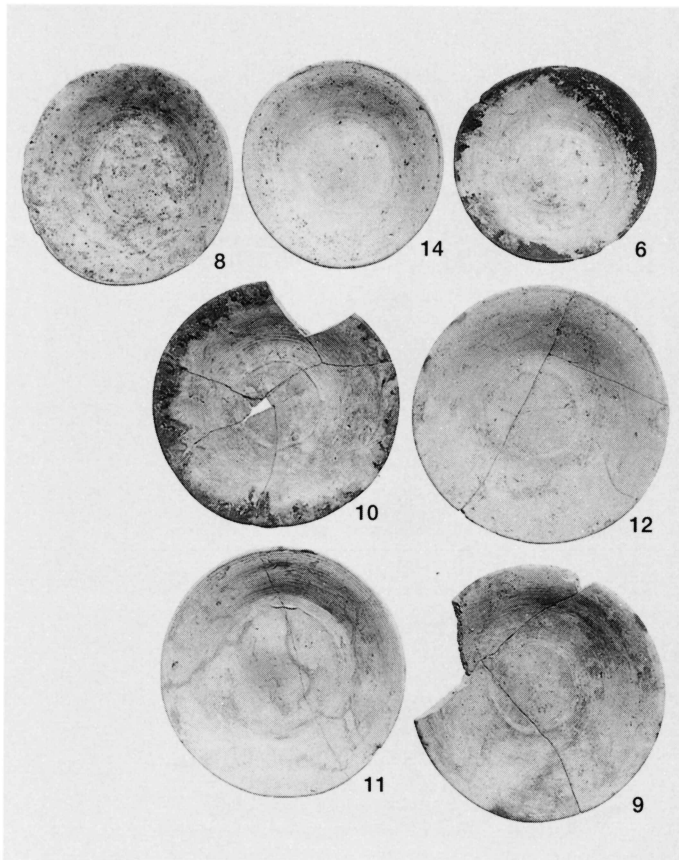
南北道路SS260 (南から)



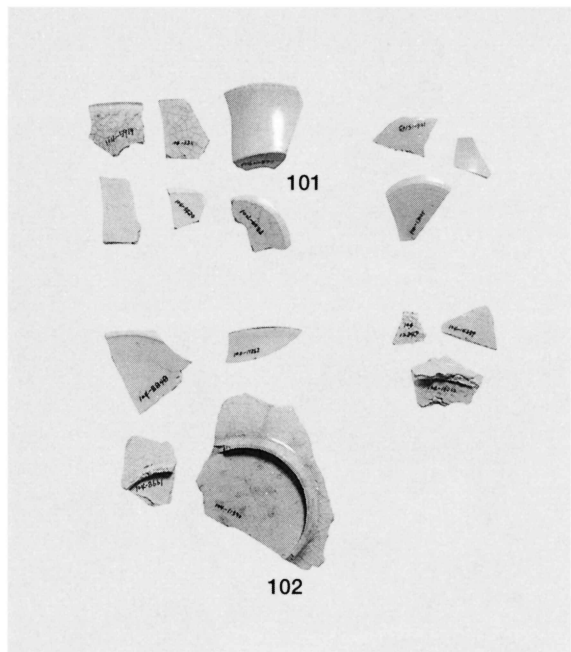
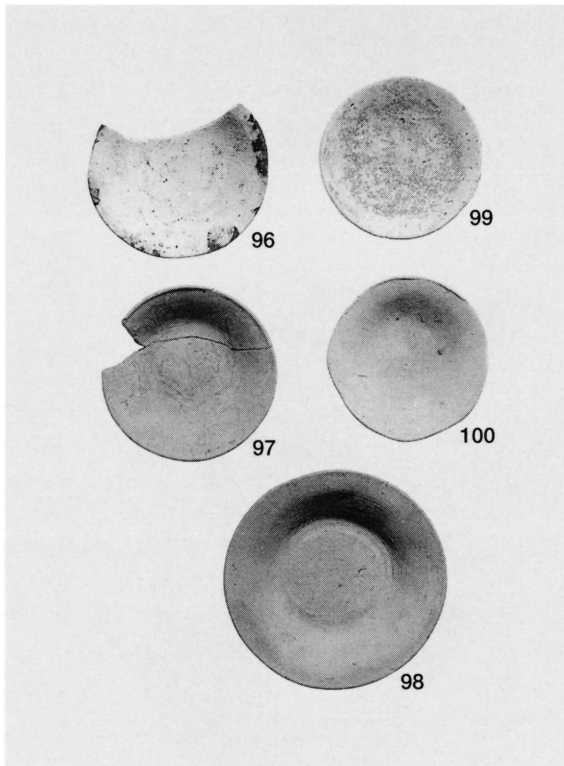
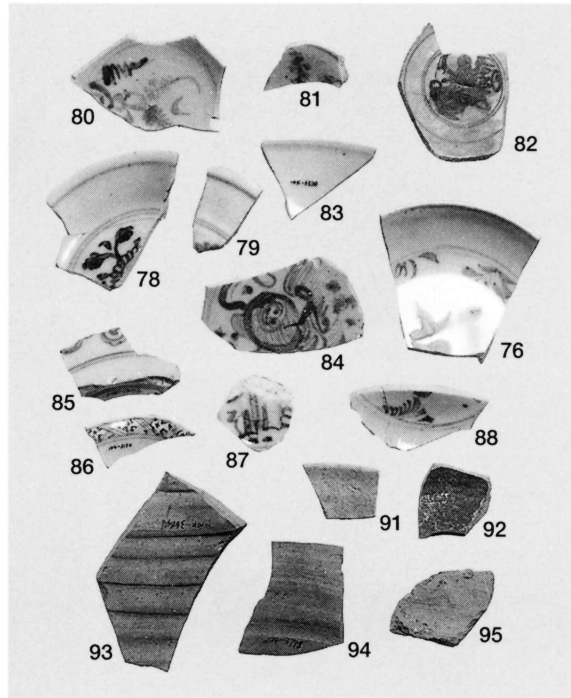
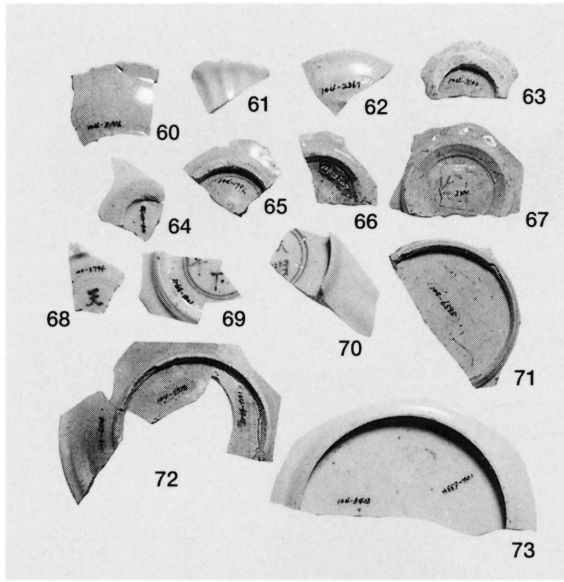
門SI4817 (東から)



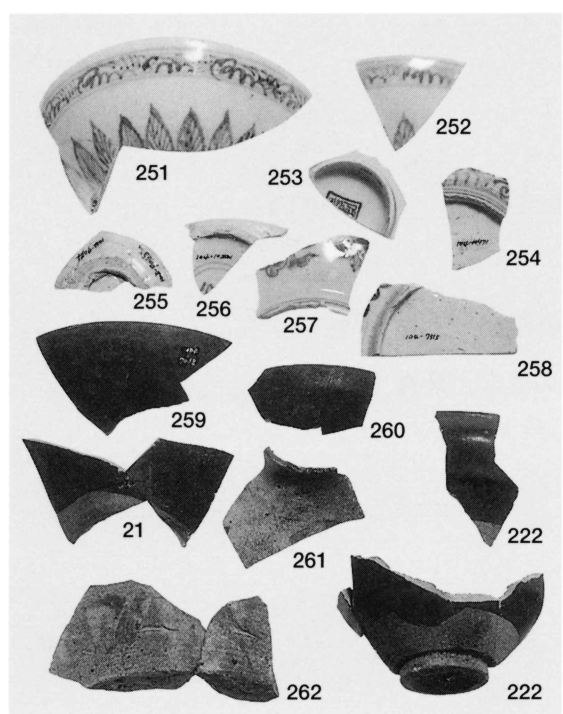
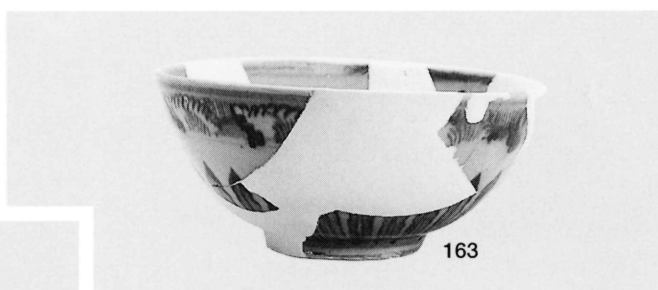
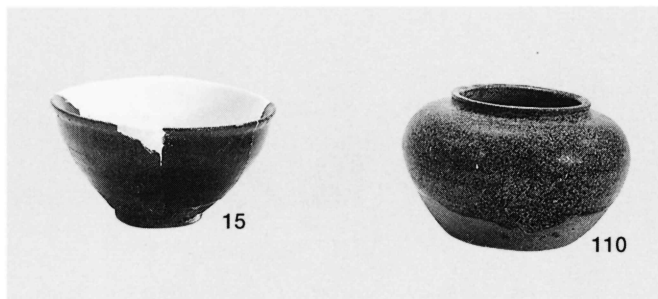




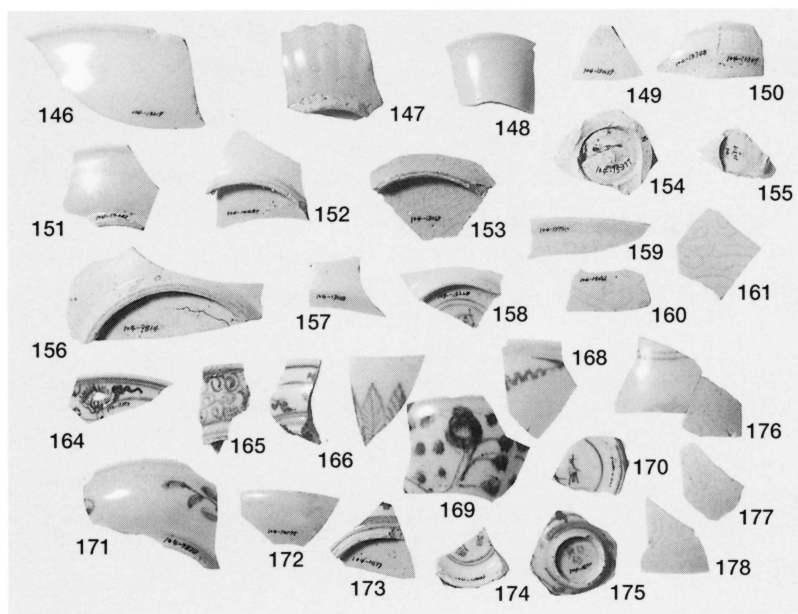
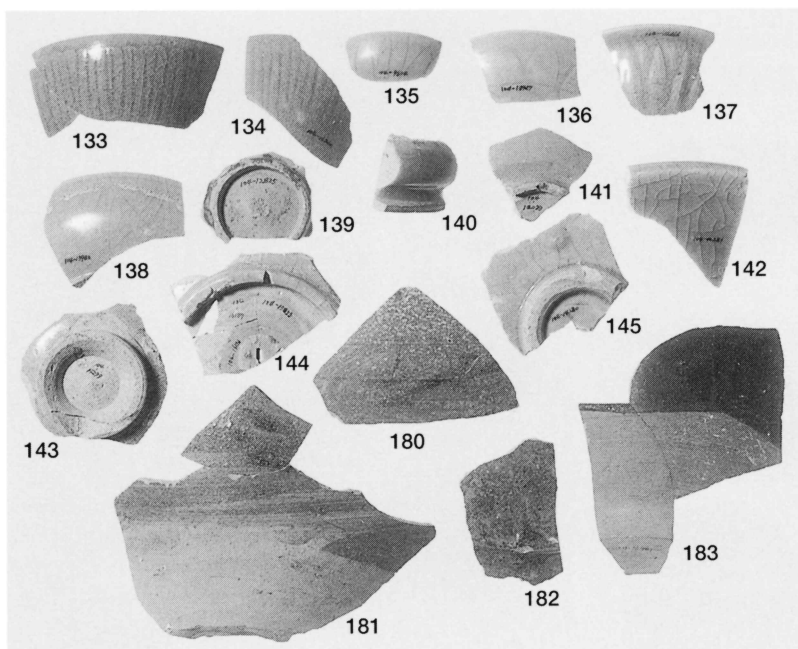
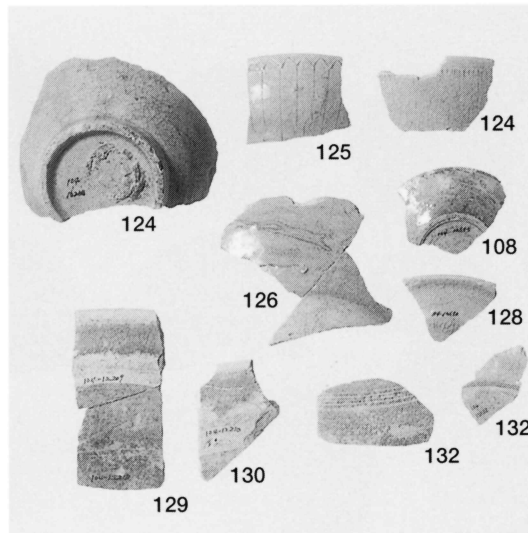
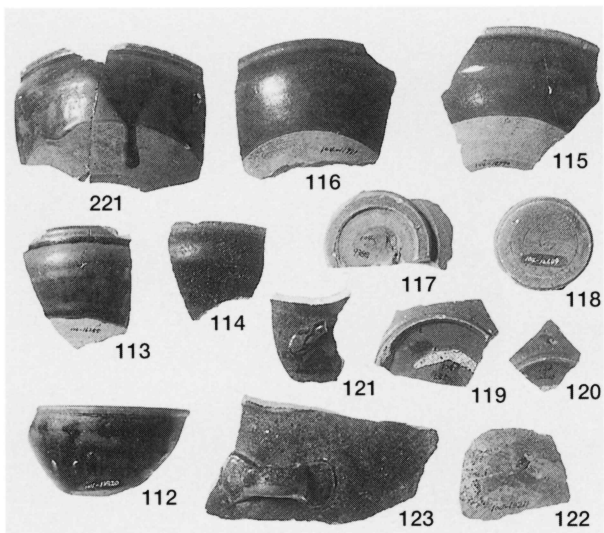




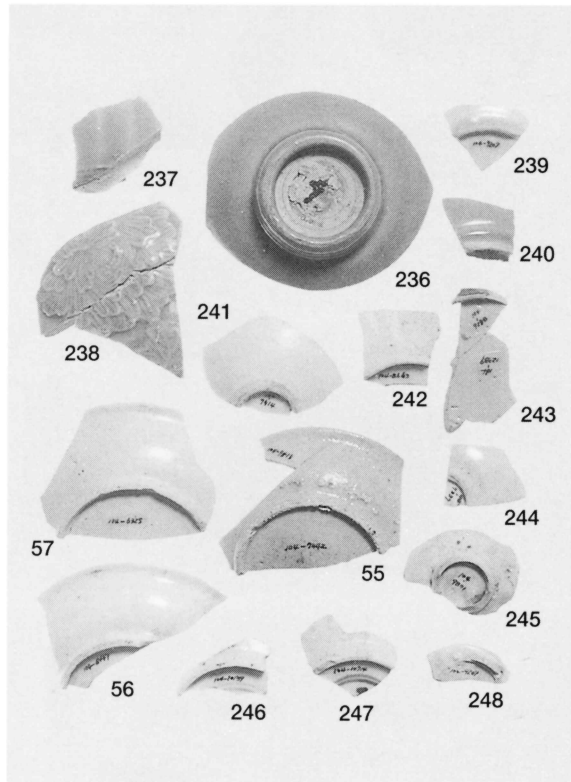
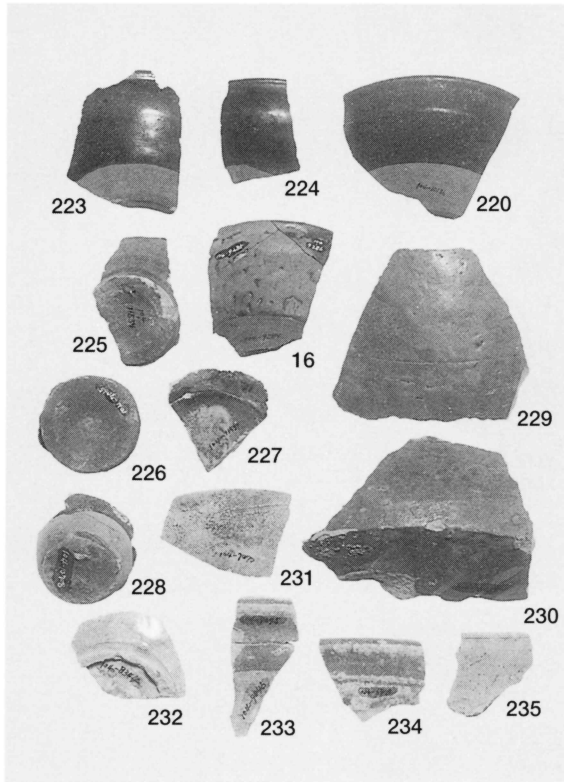
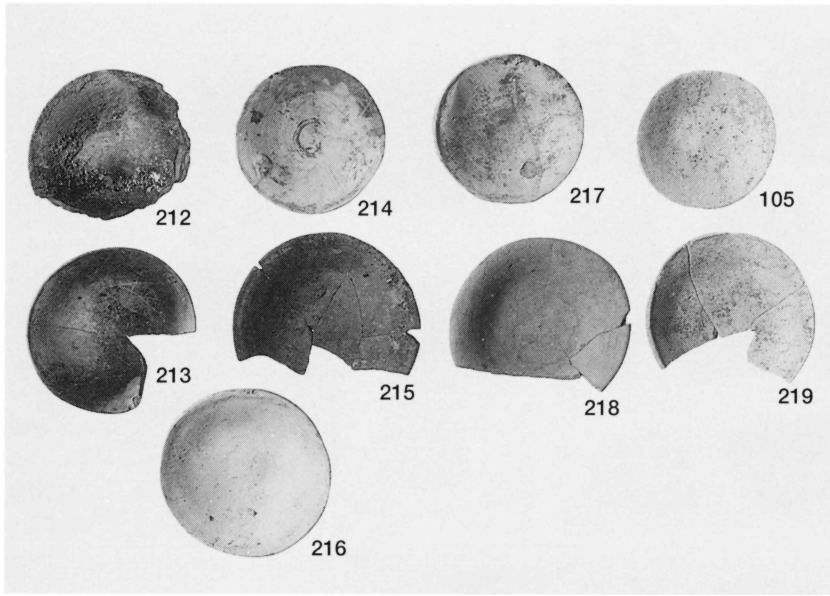
調査区南半武家屋敷その他出土遺物（3）



調査区北半武家屋敷出土遺物（1）



調査区北半  
武家屋敷出土遺物（1）



東西溝SD4798・4799出土遺物





整備地全景  
(南東から)

整備地東半  
(南から)



整備地中央（西から）



整備地西半（南から）





朝倉館北西コーナー園路整備工（北から）



第106次調査区全景（西から）



第105次調査区全景（南西から）



同調査区北半（東から）

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	とくべつしせきいちじょうだにあさくらしいせき
書名	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡
副書名	平成11年度発掘調査環境整備事業概要(31)
シリーズ番	31
編集者名	南洋一郎 佐藤 圭
編集機関	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL0776-41-2301
発行年月日	平成12年3月31日

調査地区	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
第104次調査	福井市城戸ノ内町 字斉藤地係	18210	史-31	36°59' 37"	136°17' 44"	990401~ 1220	2,000m <sup>2</sup>	環境整備 に伴う発 掘調査

調査地区	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
第104次調査	武家屋敷	室町・戦国時代 (15・16世紀)	土塁石垣3,門2,道路 1,溝5,井戸1	越前焼,土師質皿,瀬 戸美濃焼,青磁,白磁, 染付	道路を挟んだ3区画 の武家屋敷を確認 した

特別史跡

## 一乗谷朝倉氏遺跡

平成11年度発掘調査環境整備事業概報（31）

発行年月日 平成12年3月31日

編集・発行 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館©

印刷 河和田屋印刷株式会社